

関西考古学の日 2012

記念講演会

「聖武と桓武の宮都」資料

日時：平成 24 年 10 月 13 日（土） 10：00～16：00 会場：京都アスニー 4階ホール

基調講演	「聖武と桓武の宮都」	（財）京都市埋蔵文化財研究所理事長	井上 満郎・・・	資料 1
報告	「平城宮」	（財）元興寺文化財研究所	佐藤 亜聖・・・	資料 2
	「恭仁宮」	（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター	岸岡 貴英・・・	資料 3
	「後期難波宮」	（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所	高橋 工・・・	資料 4
	「紫香楽宮」	（公財）滋賀県文化財保護協会	大崎 哲人・・・	資料 5
	「長岡宮」	（公財）向日市埋蔵文化財センター	中島 信親・・・	資料 6
	「平安宮」	（財）京都市埋蔵文化財研究所	上村 和直・・・	資料 7
パネルディスカッション	司会 網 伸也	（財）京都市埋蔵文化財研究所	報告者	

主催：財団法人京都市埋蔵文化財研究所・関西考古学の日実行委員会

共催：公益財団法人京都市生涯学習振興財団（京都アスニー）

後援：京都新聞社



桓武天皇御肖像

國分寺建立... 朕、薄徳を以て忝く重任を承け、いまだ政化を弘めず。寤寐多く慚づ。古の明主は皆先業を能くし、国泰かに人樂しみ、災除き福至る。何の政化を修めてか能く此の道に臻らんや。頃者、年穀豊かならず、疫癘頻りに至る。慙懼交も集りて、唯勞して己を罪す。是を以て広く蒼生のために遍く景福を求む。故に前年馭を馳せて天下の神宮を増し飾へ、去歳普く天下をして釈迦牟尼仏の尊像高さ一丈六尺なる者各一鋪を造り、並びに大般若經各一部を写さしむ。今春より已来、秋稼に至るまで、風雨序に順ひて五穀豊穰なり。此れ乃ち誠を徴し願を啓くこと靈貺答ふるが如し。載ち惶れ載ち懼れて、以て自ら寧んずることなし。經を案するに云く、若し国土に講宣誦誦し、恭敬供養して此の經を流通する王あらば、我ら四王、常に來りて擁護し、一切の災障、みな消殄せしむ。憂愁疾疫もまた除き差えしめ、所願心に遂げて恒に歡喜を生ぜん、てへり。宜しく天下諸國をして各敬ひて七重塔一区を造り、並びに金光明最勝王經・妙法蓮華經各一部を写さしむべし。朕はまた別に金字の金光明最勝王經を擬へ写して、塔ごとに各一部を置かしむ。冀ふ所は聖法の盛んなること天地と与に永く流へ、擁護の恩、幽明に被らしめて恒に満ちんことを。それ造塔の寺は兼ねて國の華たり。必ず好処を択んで実に長久にすべし。人に近きときは則ち薫焜の及ぶ所を欲せず、人に遠きときは則ち衆を勞して帰集することを欲せず。国司ら各宜しく務め嚴飾に存し、兼ねて潔清を尽すべし。近く諸國を感ぜしめて、庶幾くは臨護せしめんことを。遐迩に布告して朕が意を知らしめよ。

日本紀略 長元元年九月廿七日(七二五)

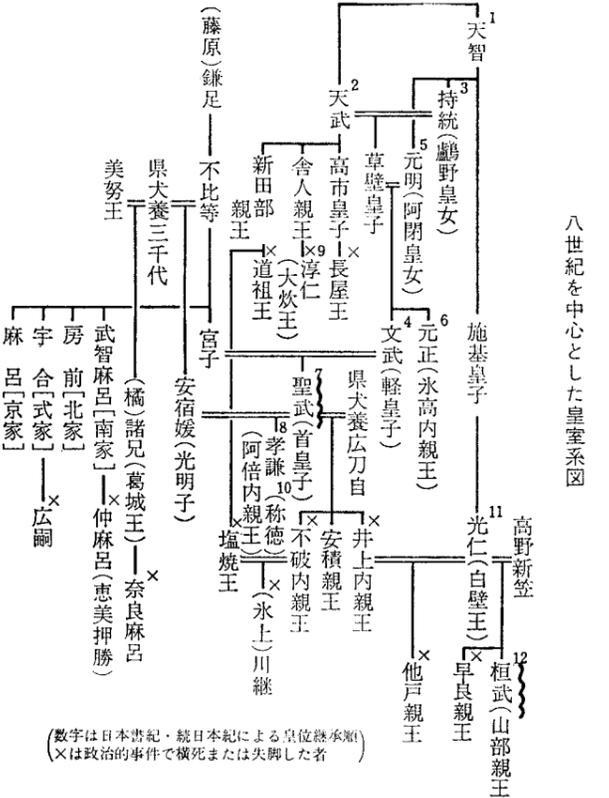
納言兼式部卿近江按察使藤原種繼被賊襲射。兩箭貫身。丙辰車駕至自平城。種繼已薨。乃詔有司搜捕其賊。云々。仍獲竹良并近衛伯者。種繼中衛。杜鹿木積麿。勅右大弁石川名足等推勘之。種繼云「主税頭大伴眞麿。大和太掾大伴夫子。春宮少進佐伯高成。及竹良等同謀。遣種繼害種繼云々。繼人高成等並欺云。故中納言大伴家持相謀曰。宜唱大伴佐伯兩氏以除種繼。因啓皇太子。遂行其事。窮問自餘黨。皆承伏。於是首惡左少弁大伴繼人。高成。眞麿。竹良。湊麿。春宮主書首多治比濱人同誅斬。及射種繼者。種繼積麿二人斬於山崎。南河頭。又右兵衛督五百枝枝王。大藏卿藤原原雄依。同坐此事。五百枝枝王降死流伊豫國。雄依及春宮亮紀白麿。家持息右京亮永主流。隱岐。東宮學士林忌守稻麿流伊豆。自餘隨罪亦流。○己未。任官。○庚申。詔曰。云々。中納言大伴家持。右兵衛督五百枝枝王。春宮亮紀白麿。左少弁大伴繼人。主税頭大伴眞麿。右京亮同永主。造東大寺次官林稻麿等。式部卿藤原朝臣平致之。朝廷傾奉。早良下。平爲君止謀氣利。今月廿二日夜亥時。藤原朝臣平致事依。勸賜申。久。藤原朝臣在波不安。此人平掃退。半止。皇太子亦掃退。且仍許訖。近衛種繼。中衛木積麿二人。平爲互致。支止。申云々。是日。皇太子自內裏歸於東宮。即日戌時。出置乙訓寺。是後。太子不自飲食。積十餘日。遣宮内卿石川垣守等。駕船移送淡路。比至高瀬橋頭已絕。載屍至淡路。葬云々。至於行幸平城。太子及石大臣藤原朝臣是公。中納言種繼等並爲留守。種繼照矩催檢燭下被傷。明日薨。於第。時年卅九。天皇甚悼惜之。詔贈正一位左大臣。又傳種繼等。遣使就柩前告其狀。然後斬決。

日本後紀 天長元年(八二四)

天皇天皇、心万機に倦み、慮を積重に深くし、遂に位を天皇に讓る。初め童謡有りて曰わく、「おおみやにただにむかえるやえのさかいたくなふみそつちにはありとも」と。有識の者以為らく、「天皇登祚の微なり」と。天皇性、至孝なり。天宗天皇の崩するに及びて、殆ど喪するに勝えず。歳時を踰ゆと雖も、肯えて服を積かず。天皇徳度高時にして、天姿巖然たり。文華を好まずして、遠く威徳を照す。宸極に登りてより、心を政治に勵し、内には興作を事とし、外には夷狄を攘つ。当年の費と雖も、後世頼とす。

Table with columns: 西暦, 和暦, 干支, 政, 治, 社会・文化, 天皇. Contains historical events from 781 to 793 AD.

Table with columns: 西暦, 和暦, 干支, 政, 治, 社会・文化, 天皇. Contains historical events from 794 to 806 AD.



八世紀を中心とした皇室系図

(数字は日本書紀・続日本紀による皇位継承順) (×は政治的事件で横死または失脚した者)

平城宮 ーその基本構造と変遷ー

財団法人 元興寺文化財研究所
主任研究員 佐藤亜聖

はじめに

平城京への遷都は、慶雲4年（704）に帰国した遣唐使が持ち帰った唐長安城の情報が藤原京とかけ離れていたためにこれを廃止し、新たに長安城をモデルとした平城京が造られたという考えが支配的である。しかし、74年間続いた平城京は、784年の長岡京遷都まで安定した形態を持ち続けたわけではなく、特に聖武朝前後を中心に大規模な改変を繰り返したことが判明している。ここでは平城京中枢の平城宮を中心にその変化を概観し、聖武朝前後の都城改変の意味を考えたい。

1. 平城宮の基本構造

宮都中枢は大極殿地区と朝堂地区・朝集院地区、内裏地区によって構成されているが、田辺征夫氏の用語（田辺1997）に従い一括して「推定第一次（二次）大極殿地域」と呼称する。「第一次」「第二次」という用語も大極殿院・朝堂院のシンプルな移動モデル時代の用語であり、現状にそぐわないが研究史上定着している用語として使用する。

【推定第一次大極殿地域】

- ・大極殿 東西53m、南北30mの基壇。山城国分寺と一致。『続日本紀』には平城宮→恭仁宮→山城国分寺金堂に。記録との一致からも本来の大極殿。ただし南面築地回廊の整地土から和銅3年（710）木簡が出土し、遷都当初は未完成であったことが判明。平城還都の後は北端に掘立柱建物が密集する、全く別の施設になる。『続日本紀』中の「中宮」「西宮」？
- ・朝堂院 東西200m、南北280mの範囲に2棟×2列＝4棟の大型建物を配置。藤原宮、平城宮第2次大極殿地区、平安宮はいずれも12堂型式の朝堂院であり、朝堂院としては異質。東区画堺に伴う南北溝が715年銘木簡出土の土坑を切るの、成立は715年以降。

【推定第二次大極殿地域】

- ・大極殿 東西46m、南北24mの基壇。
- ・朝堂院 東西178m、南北284mの範囲に12堂が配置。朝集院あり。

推定第二次大極殿地域下層からは同じ配置の掘立柱建物群を発見。これらの年代は大尺設計であることと、出土遺物から遷都当初から恭仁京遷都直前まで継続していると推定。

【問題点1】

奈良時代当初は第一次大極殿地域がやや遅れるものの、第二次大極殿地域下層遺構が併用されている。第一次大極殿地域の大極殿は、巨大な礎石建物で、朝堂とともに新調した平城宮式の瓦を使用す

るが、第二次大極殿地域の主殿は檜皮葺で藤原京式の瓦を使用。階層差は明白。

第一次大極殿地域の推定朝堂は715年以降の創建。とすると和銅6年（713）の「朝堂」記載、靈龜元年（715）年の新羅使接待記録の「朝堂」は第二次大極殿地域の下層遺構以外には考えられない。→平城京遷都当初は第二次大極殿域下層の施設のみか？

◎推定第二次大極殿地域の大型建物は何？

①大安殿説→朝堂正殿としての大安殿。

②大極殿2棟並列説 礎石立ちの長安城モデルの大極殿と、難波宮以来の掘立柱型式大極殿を並置して融和を図る。→大極殿は唯一無二の存在。藤原京ではすでに大極殿は瓦葺基壇建物。平城京で掘立柱建物にする理由がない。

【問題点2】二つの「朝堂」の意味は？

今泉隆雄氏の説→推定第一次大極殿院には朝集院がなく、二次下層にはある。二次下層は毎朝政務を行うために臣下が待機する場所を必要としたが、一次は臨時的な使用の場だったのでこうした空間を必要としなかった。

一次の4堂型式は位階表現の場、二次下層の12堂型式は実務のための型式。

⇒一次が儀礼・饗宴空間、二次下層は実務空間？平安宮豊楽院朝堂と朝堂院朝堂の使い分けと同じ。朱雀門の正面が儀礼的空間。

2. 聖武朝（724-749）の変化

(1) 養老造作

養老5年（721）、藤原武智麻呂を造宮卿に任命、宮の改作を行う。聖武の即位を見越した改変。推定第二次大極殿地域朝堂の荘厳化。715年以降聖武即位を前後する時期（回廊東側溝延長溝出土の木簡による）までの間に、推定第一次大極殿地域に「朝堂」設置。これも養老造作に関連か？岩永省三氏は瓦編年との対比から朝堂設置を靈龜一養老と想定（岩永1996）。いずれにしても聖武即位前に、大極殿と朝堂が整備され、藤原宮にはない巨大な儀礼空間が完成。

内裏基本形態の確立

(2) 平城還都

最大の変化は740年の恭仁遷都と、745年の還都。還都により大極殿は内裏・朝堂・朝集院と一体化して安定化。朝堂も礎石建物に。儀礼空間の優位から実務空間優位へ。

推定第一次大極殿地域の大極殿跡地には長安城大明宮麟徳殿を模した正殿・付属屋からなる建物群。⇒唐長安城モデルへの接近

3. 京の変化

十条の改変と羅城の付加。遷都当初は都城南面に十条条坊と考えられる条坊付加。平城宮土器Ⅰ・Ⅱ以降Ⅲまでに廃絶。その後羅城設置。⇒聖武朝を前後する時期に唐風都城への大きな改変。

近年の調査で九条大路幅員が27m（90小尺）の可能性判明。網伸也氏の指摘する平安京九条大路幅と一致（網2011）。平城京で聖武朝前後に決められた京極の規模がその後の規範に。

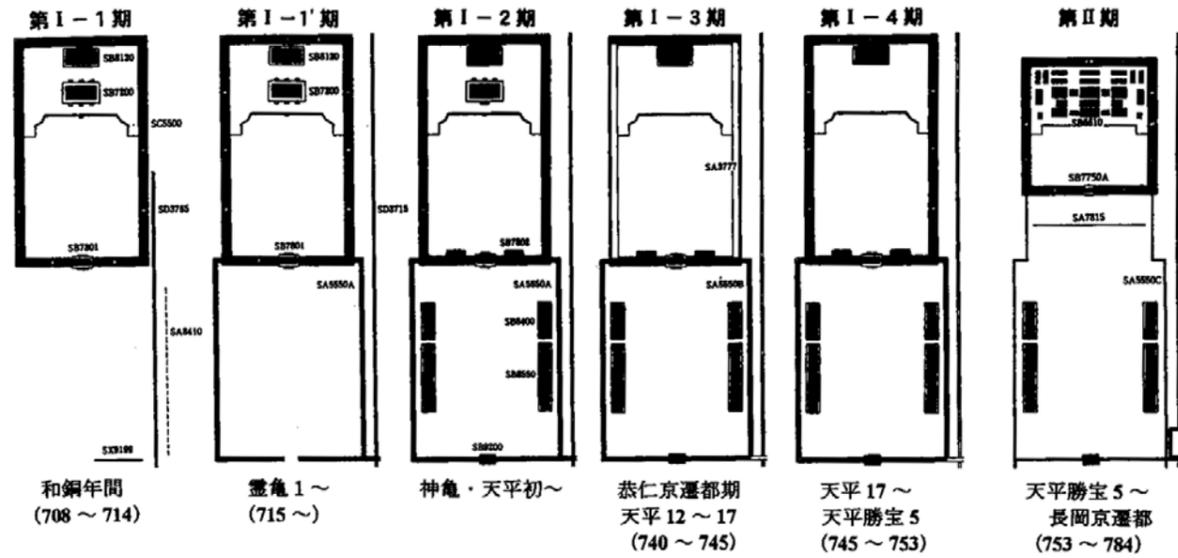


図2 平城宮変遷図 (奈良文化財研究所 2003『東アジアの古代都城より』)

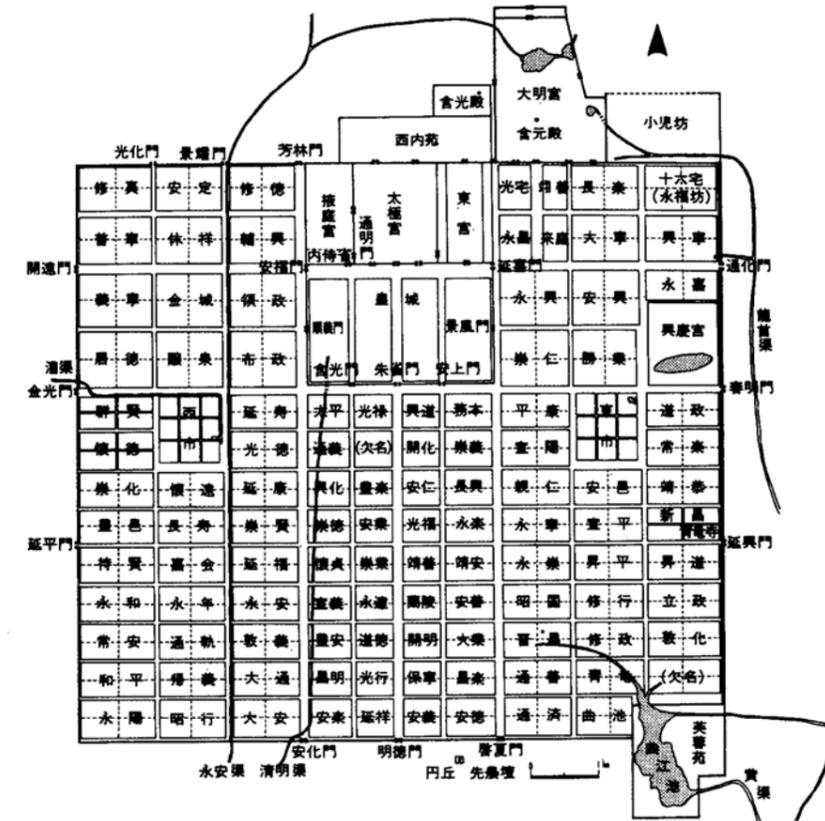


図5 唐長安城 (奈良文化財研究所 2003『東アジアの古代途上より』)

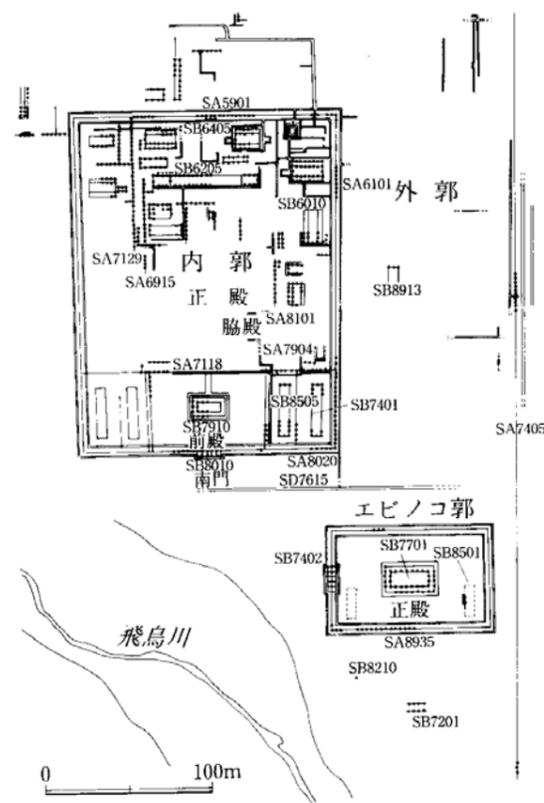


図3 推定飛鳥浄御原宮の遺構 (林部 2001より)

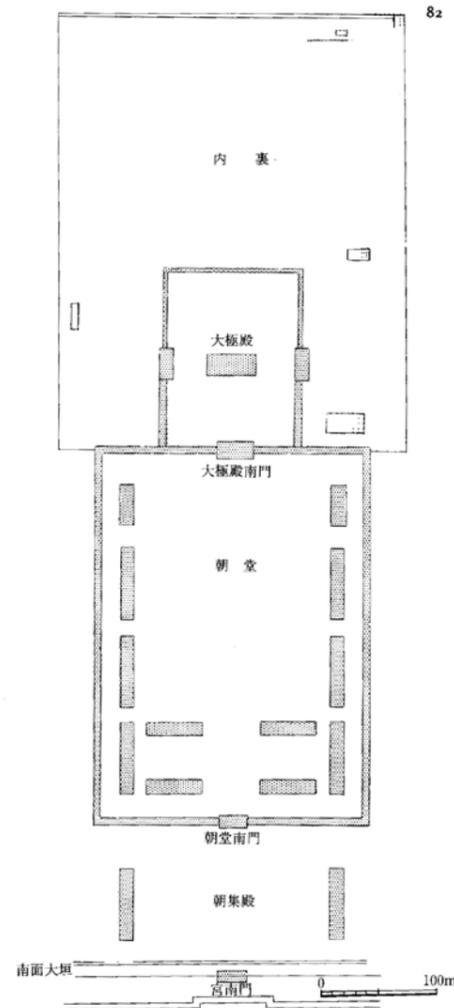


図4 藤原宮 (林部 2001より)

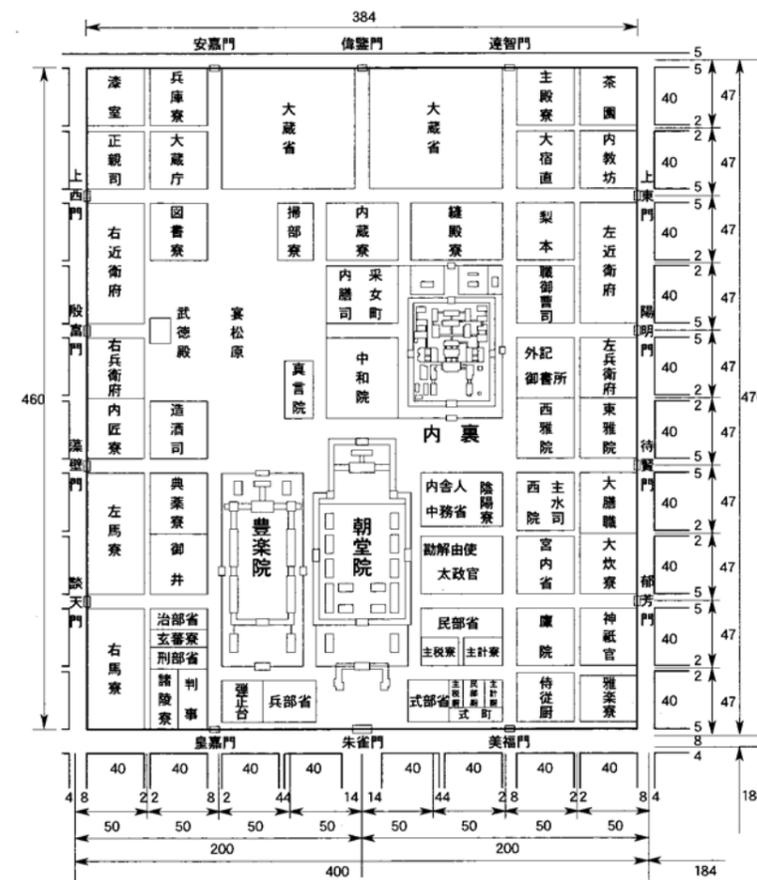


図6 平安宮の構造 (網 2011より)

恭仁宮跡の調査

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

岸岡 貴英

1. はじめに

恭仁京くにかきょうは、聖武天皇によって木津川市に造られた都です。天平12（740）年から16（744）年の間、国の首都としての役目を担いました。恭仁京の中心、恭仁宮には、内裏だいりや大極殿だいきょくでん、朝堂院ちょうどういんなど国の中でも最も重要な施設が造られていました。しかし、天平18（746）年には、その中心部が山背国分寺やましりこくぶんじへと造り替えられました。

恭仁宮は、これまでさまざまな調査、研究がおこなわれてきましたが、足利健亮氏による歴史地理学的な研究は、大きな指針となっています。足利氏は恭仁小学校北の土壇を大極殿跡と考え、8町（約1km）四方を宮域と想定、京城についても平城京のプランを基本に、東西約6.1km、南北約4.8kmの独自の学説を展開しました（第1図）。

調査は昭和48年度から京都府教育委員会が、昭和61年度からは、旧加茂町教育委員会（現木津川市教育委員会）と京都府教育委員会が分担して実施してきました。平成8年度には東西約560m×南北約750mの宮の範囲が確定、平城宮の約1/3の面積と判明しました（第2図）。その結果、宮は北の丘陵から木津川に向かってのびる高台にあり、西側を深い谷が走り、東側を小河川が流れる地形に位置していることがわかりました。なお、宮の造成に伴い以前の古墳のほとんどが削平されたと考えられています（第3図）。

2. 発掘調査の成果

宮の四至を確認する調査では、大垣おおがき（築地塀ついでい）の基礎地業や基壇土が見つかり、深い谷の走る西側を除き大垣（築地塀）が巡らされたと考えられています（第5図）。また、宮の東面では八脚門と考えられる南門跡を確認しています（第4図）。さらに、宮南西地区では、大垣（築地塀）基壇の基礎を補強する目的で石組を設け、排水のための溝をつくるなどさまざまな工夫が認められました（第6図）。

大極殿は、東西約53m×南北約28mの基壇上にある9間×4間（約45m×約20m）の建物で、平城宮から移築されてきたことが明かとなりました（第8図）。建物は身舎が梁間2間18尺（5.4m）等柱間、桁行7間17尺（5.1m）等柱間、身舎もやから側柱まで15尺（4.5m）と復元されています（第9図）。調査では、13箇所礎石跡と2箇所礎石及び瓦積み基壇と石積みの階段が検出されました。なお、礎石の地業には二つの手法（第10図）があり、4隅の礎石に使用されるBタイプとそれ以外で使われるAタイプのが認められます。

*なお、恭仁宮の時期の1尺は29.6cm≒30cmと考えられています。

大極殿院の周囲に巡らされた回廊は、西北隅の調査でその実態が明かとなりました。西側の雨落ち溝と15箇所の礎石の抜き取り穴が見つかり、回廊の柱間は15.5尺等間を基本として、隅部のみ12尺等間であることが明かとなりました（第11図）。これは平城宮の大極殿回廊と同じ規格であり、『続日本紀』天平15年12月26日の条に、「平城の大極殿并に歩廊を壊ちて遷し造る」と記された記載が史実であることがわかりました。これにより、大極殿院の東西幅は約480尺（約141.5m）の規模として復元されています。

朝堂院ちょうしゅうでんいんと朝集殿院の周囲に巡らされた板塀（掘立柱塀）は、朝堂院南西隅・朝集殿院北西隅の調査と、朝集殿院南東隅の調査に重要な成果がみられました。柱間はともに10尺等間で、雨落ち溝が併行して検出されています（第12図）。

朝堂院の東西幅は約390尺（約115.8m）、朝集殿院の東西はその南端で450尺（133.9m）、南北は約420尺（約124.7m）です。その東西幅は朝集殿院がやや広いことは明かですが、朝集殿院はその南東隅の板塀（掘立柱塀）が鋭角に屈曲することから、宮の東面大垣と同じくややいびつな形状になると思われます（第13図）。

内裏だいりは、大極殿の北側に、東西に2つ並ぶ「内裏西地区」、「内裏東地区」にわかれます。

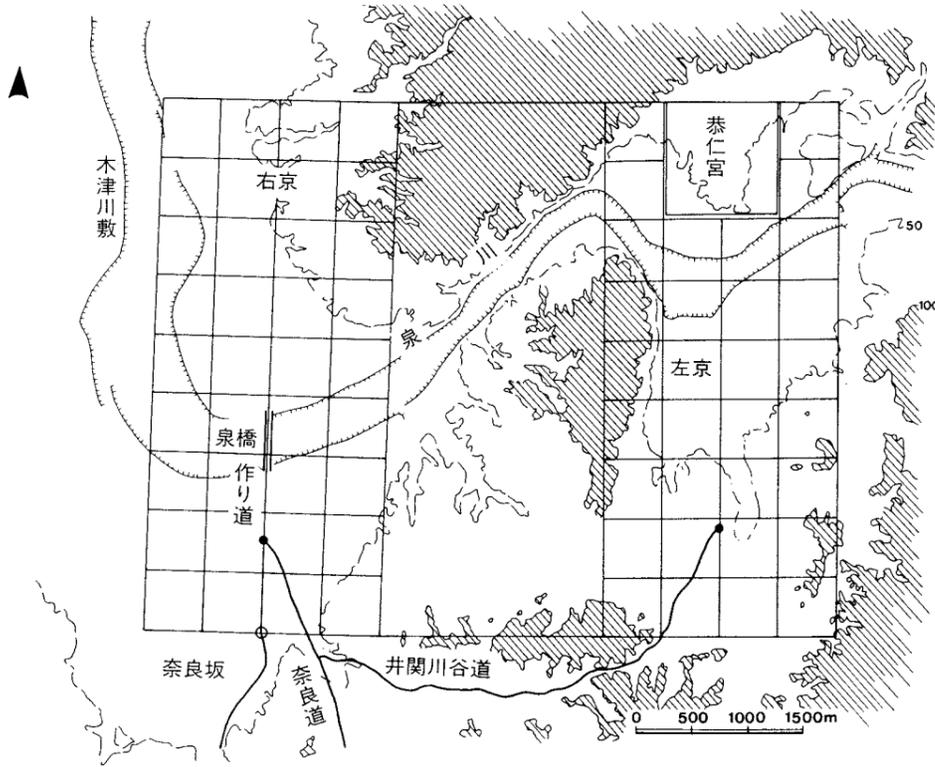
「**内裏西地区**」は、東西約330尺（約97.9m）、南北約430尺（約127.4m）の周りを全て板塀（掘立柱塀）で囲まれていました。柱間はほぼ10尺等間となりますが、一部15尺になる箇所は、門的な施設と考えられます（第16図）。中心となる建物（SB5303）は梁行4間×桁行5間の南北庇をもつ東西棟で柱間は10尺等間、北側庇のみ9尺です（第15図）。

「**内裏東地区**」は東・西・南の三方を土塀（築地塀）で、北側だけは板塀（掘立柱塀）で囲んでいました。これまでの調査で土塀の掘り込み地業や基壇の積み土などが確認されています（第17図）。「内裏東地区」の広さは東西が約370尺（約109.3m）、南北が約470尺（約138.9m）で、「内裏西地区」より一回り大きく造られていました。中心となる建物（SB5501）は梁行4間×桁行7間、四面庇をもつ東西棟、柱間は10尺等間です（第14図）。

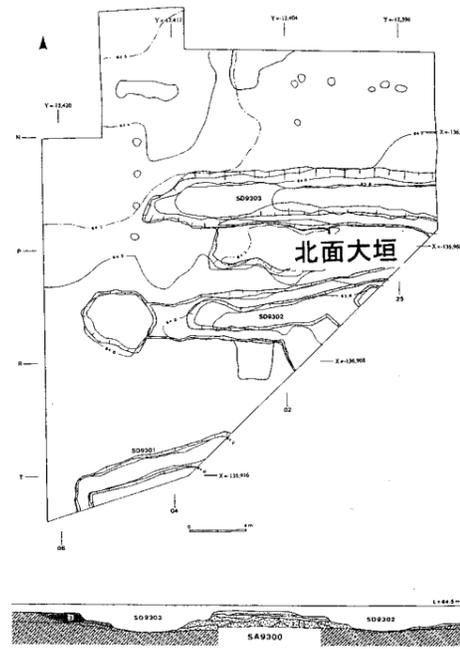
北側に柱筋をそろえた同規模の建物が確認されていますので、南北に大形建物が並び立つと考えられています。

3. おわりに

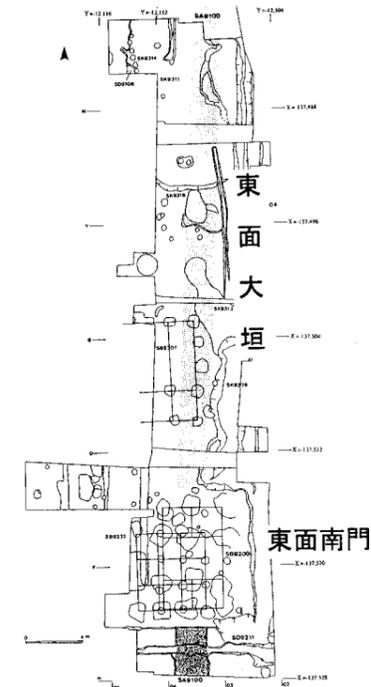
恭仁宮は現在のところ、大極殿院や朝堂院の規模に未確定なところがあり、さらには朝堂の存在も確認されていません。今後の調査でこれらの課題を明らかにする調査成果が期待されます。



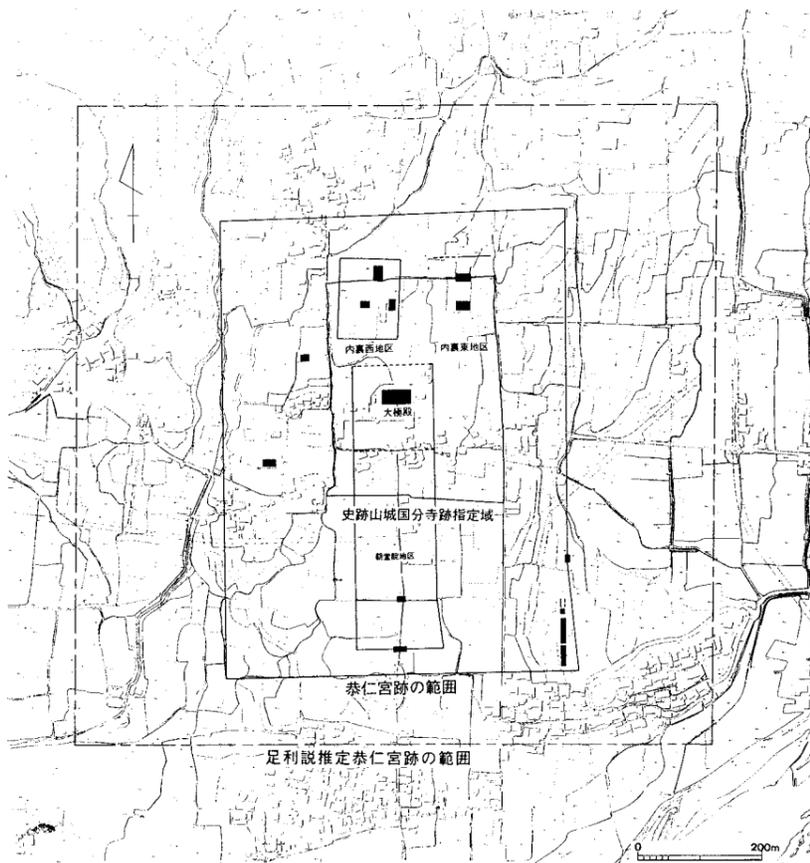
第1図 足利説恭仁京プラン復元図（足利健亮「日本古代地理研究」大明堂）



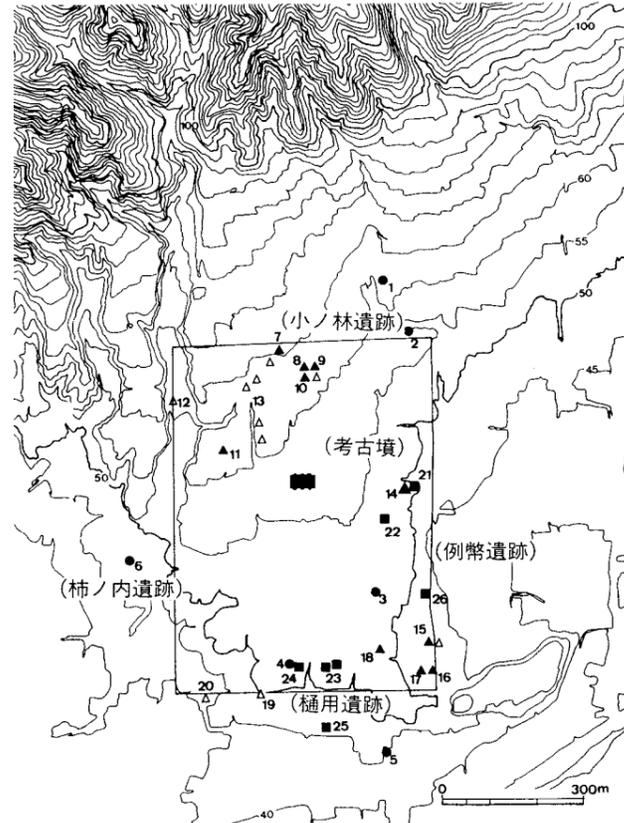
第5図 恭仁宮北面大垣検出遺構図(1/250:第2図②)
(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000に加筆)



第4図 恭仁宮東面南門検出遺構図(1/250:第2図①)
(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000に加筆)

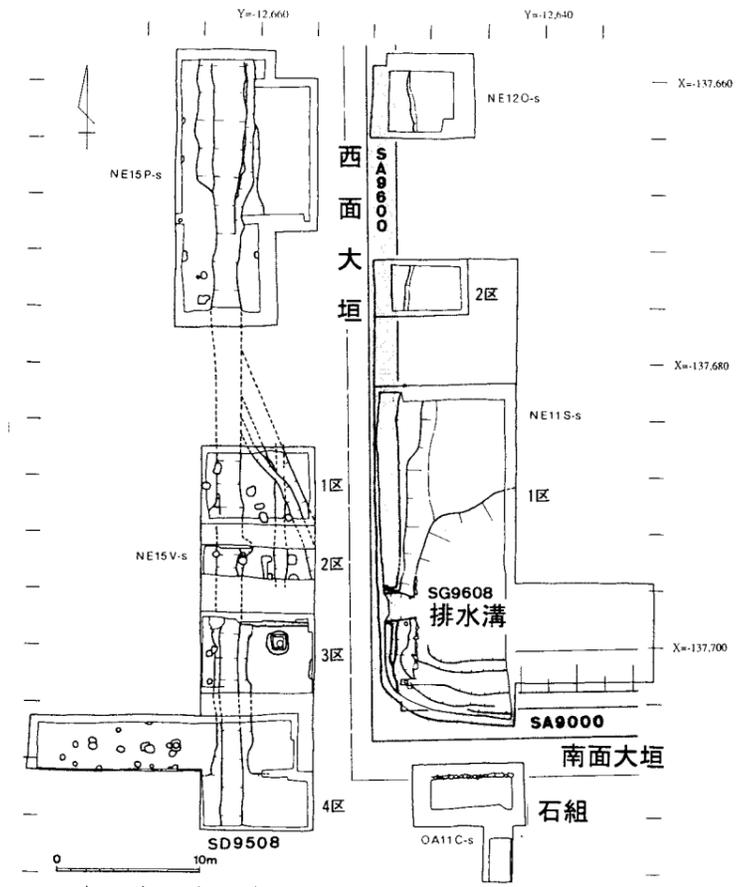


第2図 恭仁宮跡の範囲
(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000に加筆)

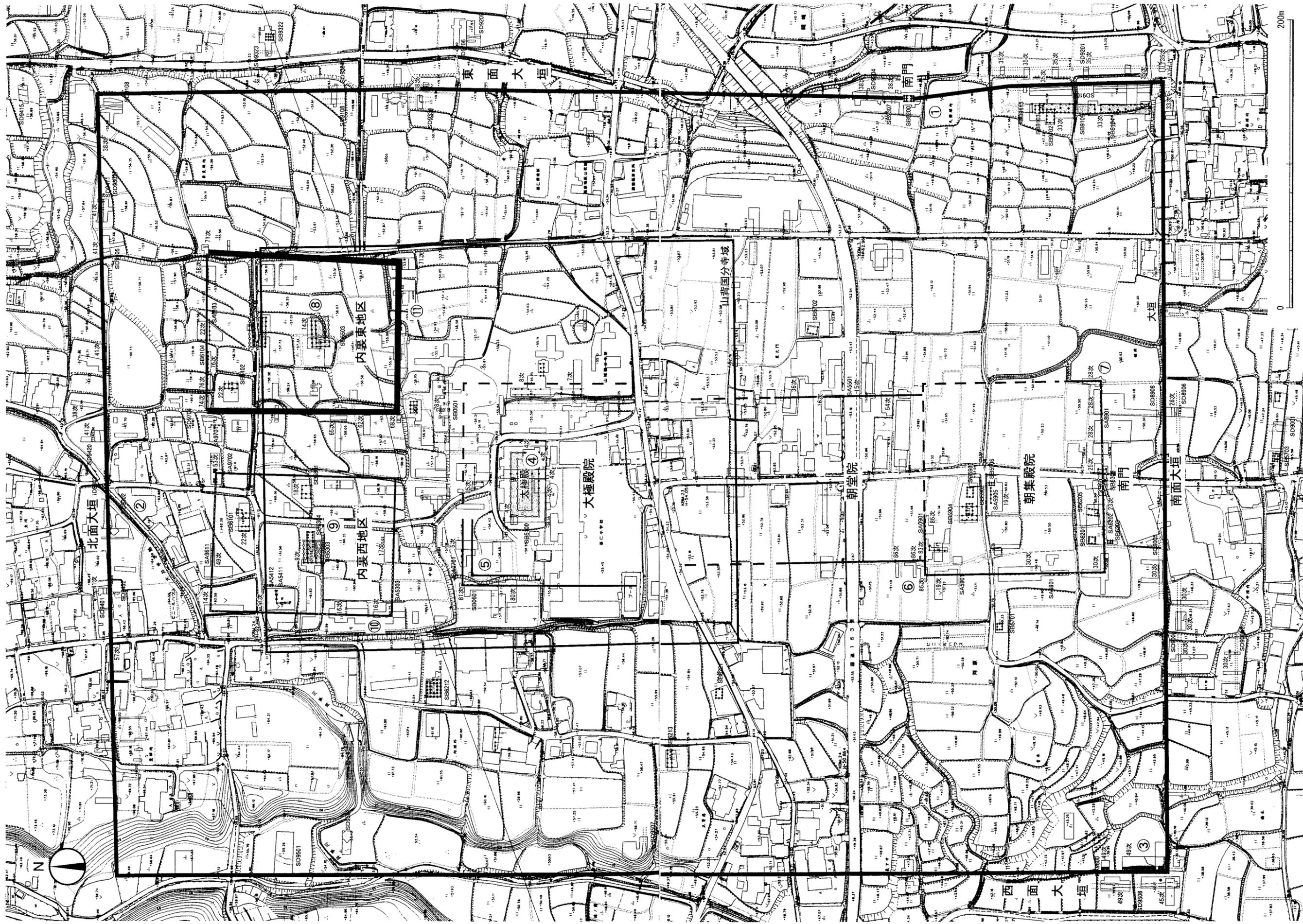


●古墳時代住居跡等検出地点
▲古墳周濠・古墳時代土壘墓等検出地点
△埴輪等古墳関連遺物出土地点
■飛鳥時代等遺構検出地点

第3図 恭仁宮跡付近の古墳・飛鳥時代の遺跡分布図
(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000)



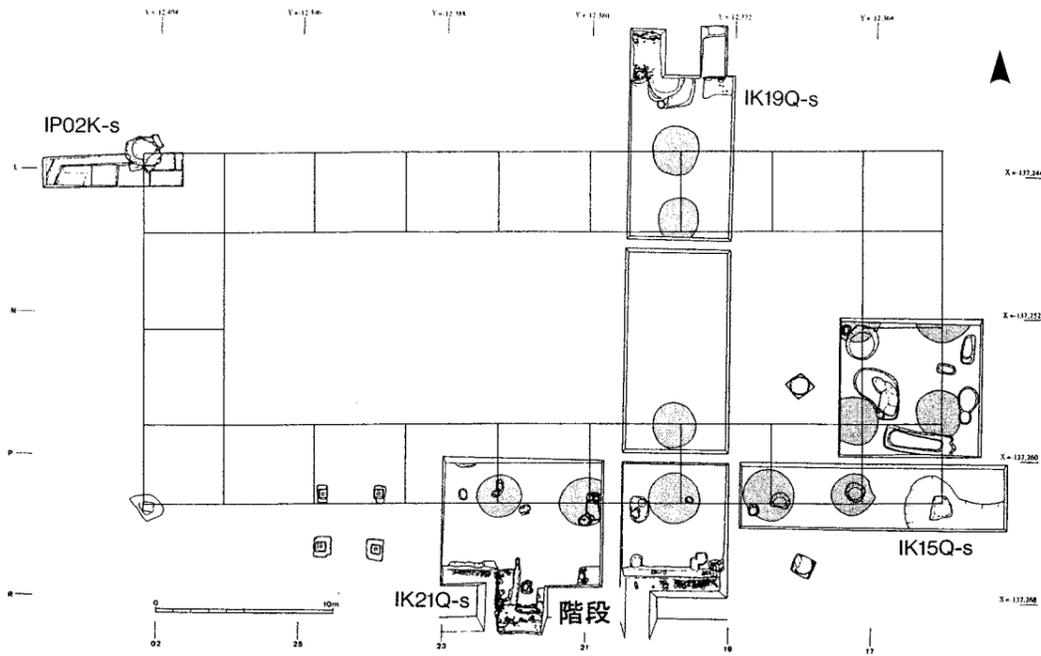
第6図 恭仁宮南西地区検出遺構図(1/250:第2図③)
(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000に加筆)



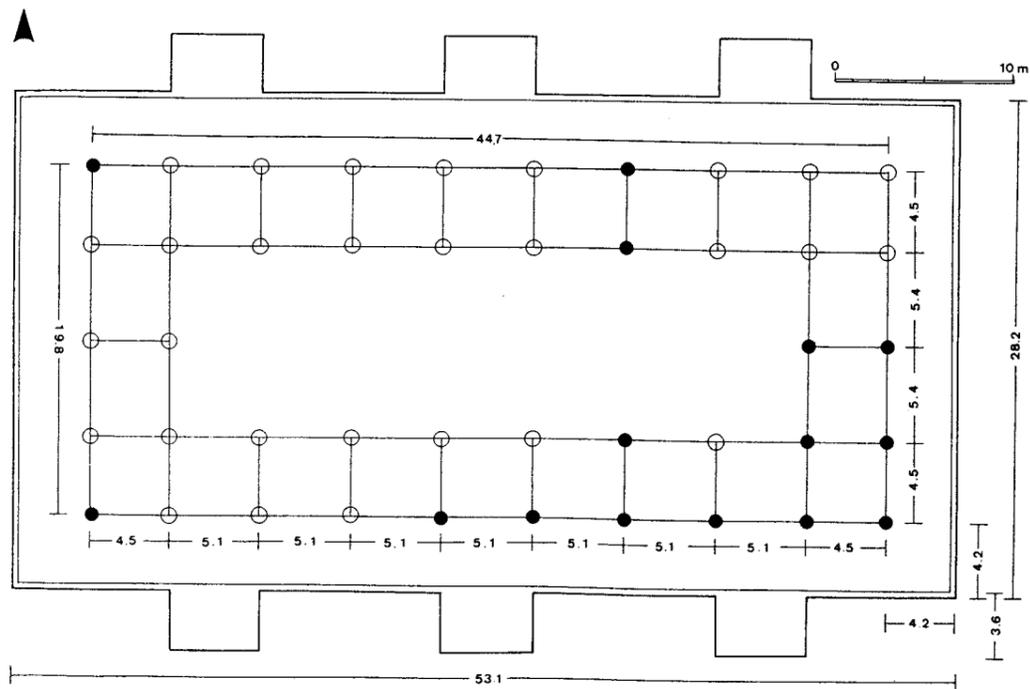
第7図 恭仁宮跡主要調査地点位置図
 (「特別展 平城の北・恭仁宮—木津川流域の奈良時代—」京都府立山城郷土資料館2010(に加筆))

資料3

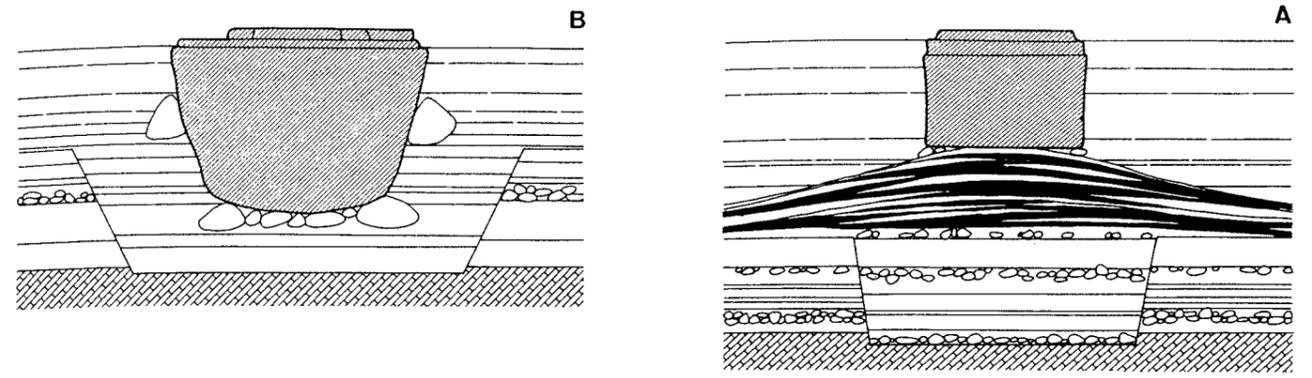
1 大極殿院地区



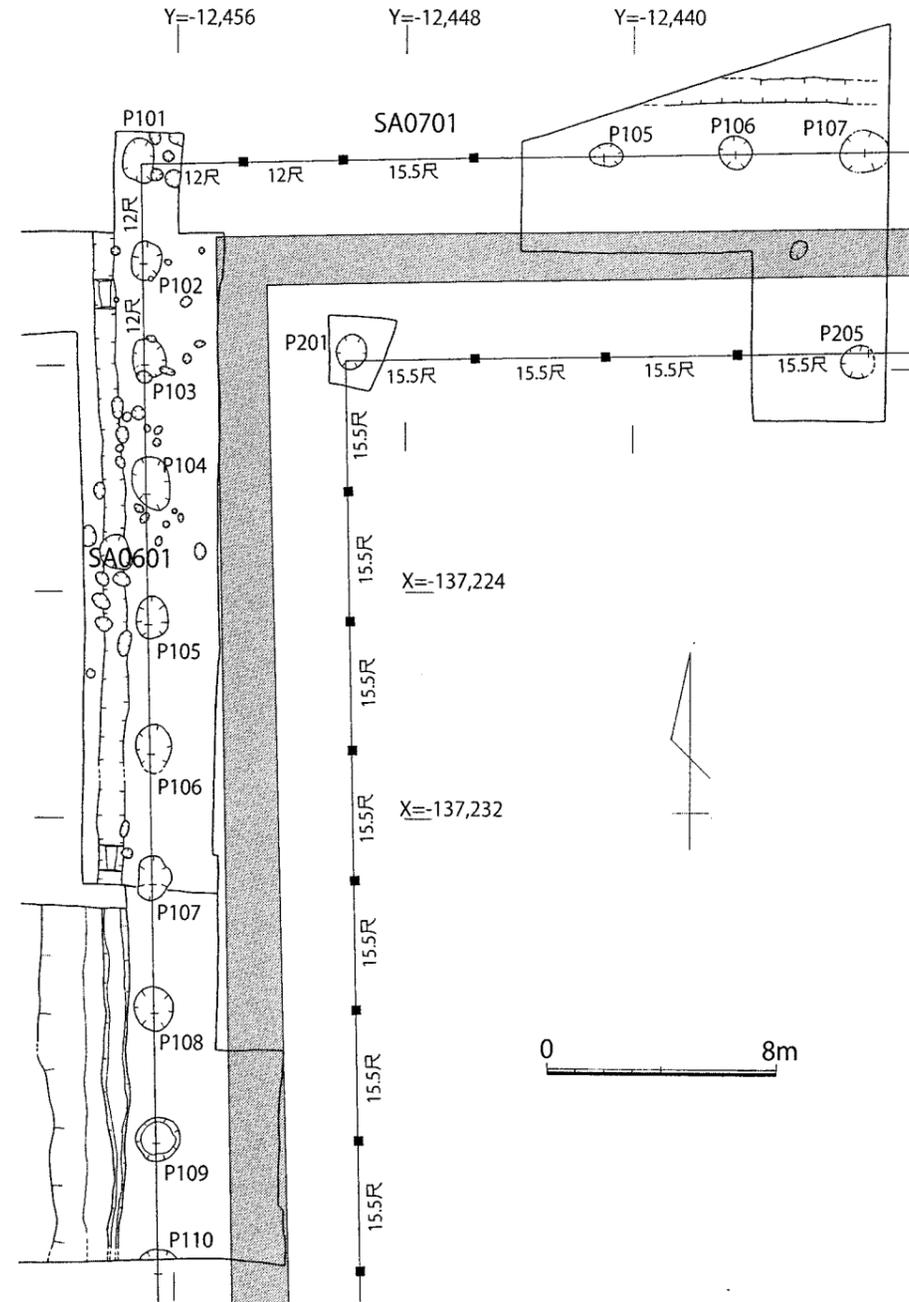
第8図 大極殿検出遺構図（京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000に加筆：第7図④）



第9図 大極殿基壇及び建物推定復元図（京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000に加筆）

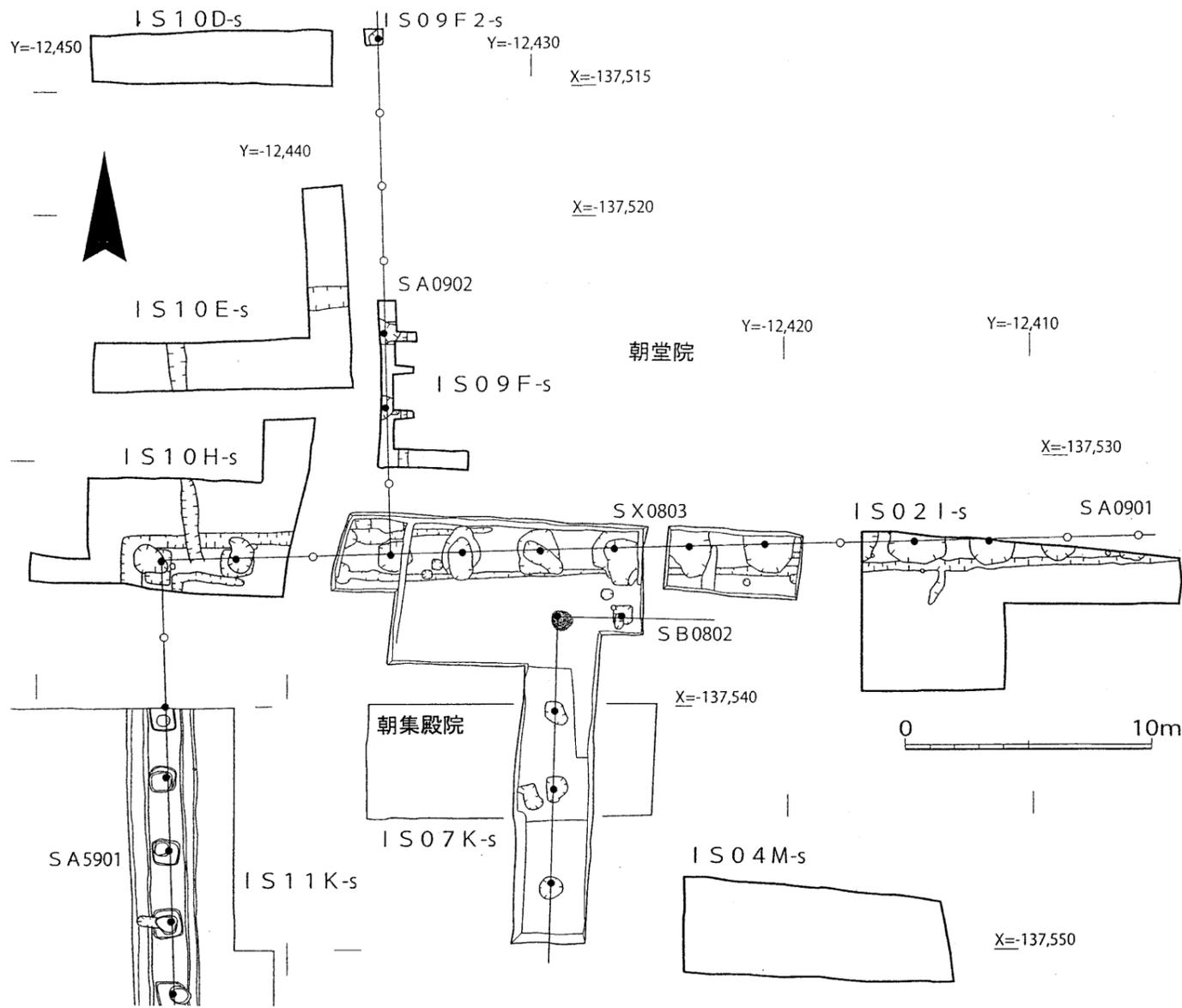


第10図 大極殿礎石断面模式図（京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000）

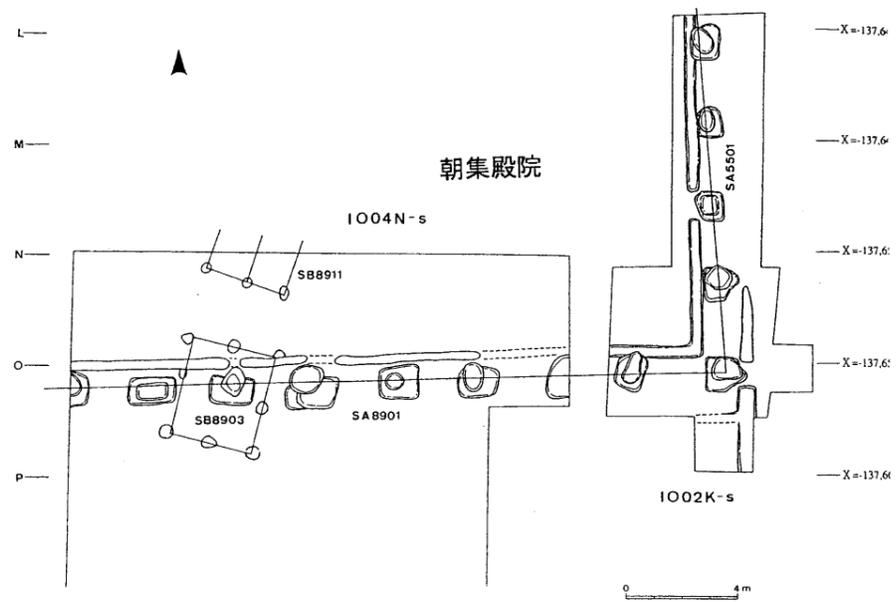


第11図 大極殿院回廊北西隅部遺構配置図（1/250：第7図⑤）

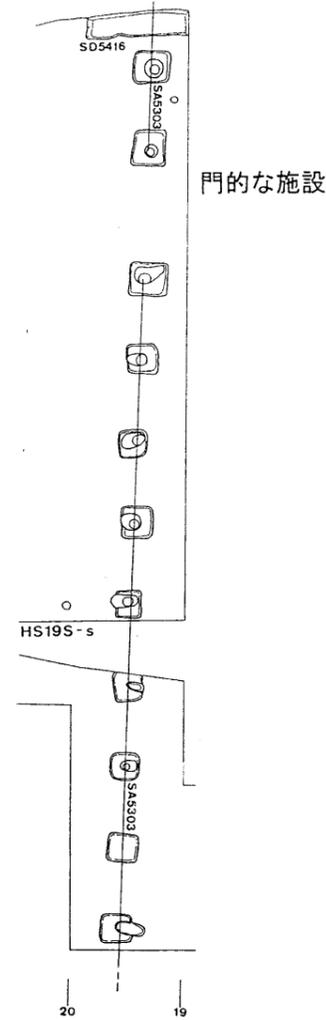
（奈良康正「恭仁宮大極殿考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター平成22年）



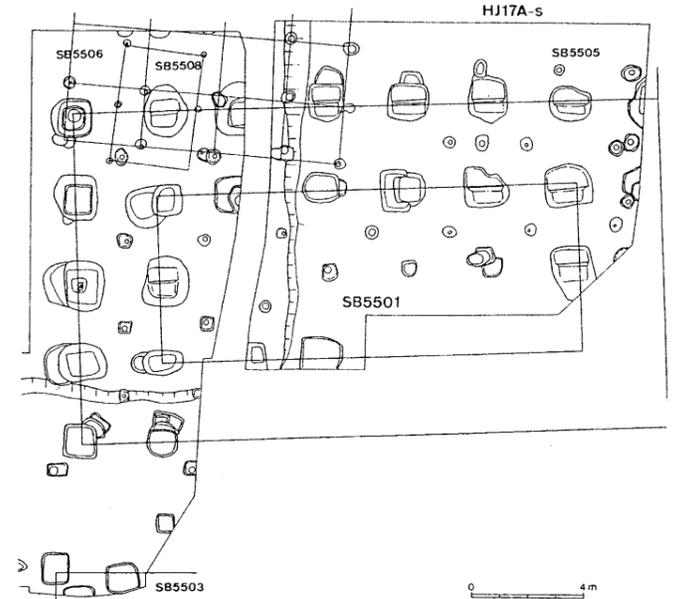
第12図 朝堂院・朝集殿院地区平成20・21年度調査区位置図(1/250:第7図⑥)
(京都府教育委員会「京都府埋蔵文化財調査報告書」平成21年度)



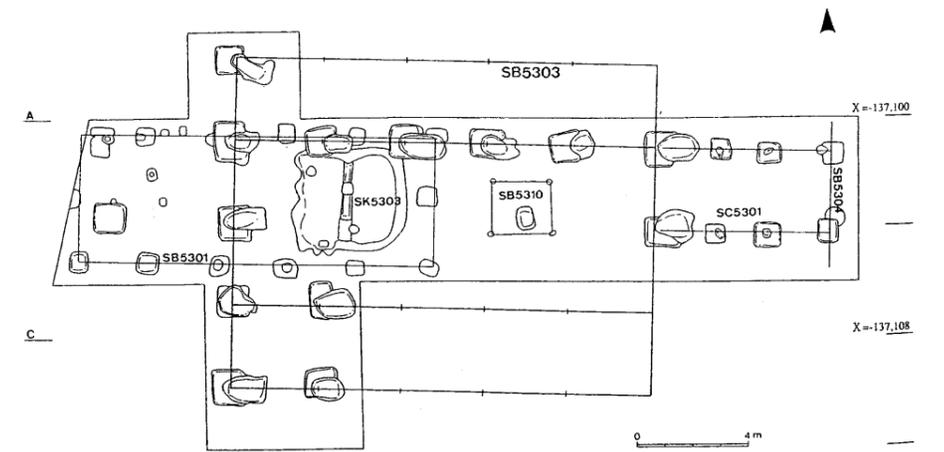
第13図 朝集殿院東南隅(IO04N・ IO02K-s)検出遺構平面図(1/250:第7図⑦)
(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000)



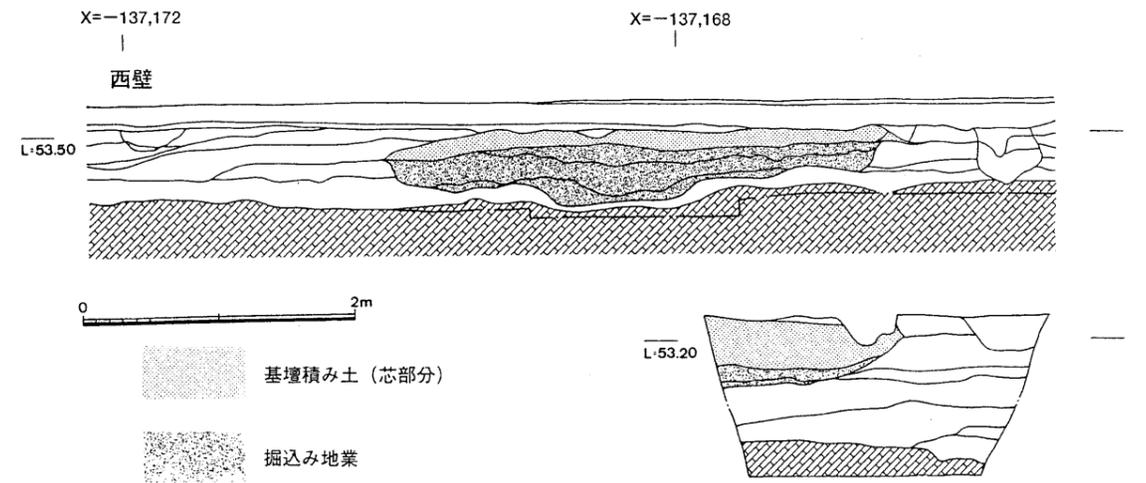
第16図 「内裏西地区」の西側の板塀(掘立柱塀)



第14図 「内裏東地区」の中心となる建物SB5501検出遺構図(1/250:第7図⑧)



第15図 「内裏西地区」の中心となる建物SB5303検出遺構図(1/250:第7図⑨)
検出遺構図(1/250:第7図⑩)



第17図 「内裏東地区」の南面の土塀(築地塀)の土層断面図(1/100:第7図⑪)

*第14~17図(京都府教育委員会「恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ」2000)

見えてきた孝謙天皇の「東南新宮」

—後期難波宮宮殿東方の発掘調査—

2012. 10. 13

大阪文化財研究所 高橋 工

1. はじめに
2. 難波宮宮殿東方の発掘調査 —a. 前期難波宮の遺構 —b. 後期難波宮の遺構
3. 後期難波宮の宮殿東方 ～山根博士時代発掘調査との邂逅～
—a. 難波宮発見の地 —b. 40年前に発見された遺構との類似
—c. 浮かび上がるふたつの区画 …孝謙天皇の東南新宮か
4. 後期難波宮の再評価
—a. 前期の官衙群 —b. 後期は2段階 —c. 後期難波宮の性格

1. はじめに

文献にあらわれる宮殿などの名前が、実際に発掘された遺跡の中でどれに相当するのかを決定することは難しい作業です。50年の調査・研究を経て、飛鳥時代の難波長柄豊崎宮と奈良時代の難波宮が中央区法円坂の遺構群に比定されることは事実となりました。しかし、他にも実際に遺構が見つからない宮殿や施設がまだまだたくさんあります。奈良時代、孝謙天皇が御した難波宮東南新宮もそのひとつで、『続日本紀』には、「天平勝宝8(756)年 2月28日(壬子)大雨。賜河内國諸社祝祢宜等一百十八人正税。各有差。是日行至難波宮。御東南新宮」とあります。

難波宮略年表	
5世紀	大型倉庫群がつけられる
6～7世紀	難波に大郡宮・小郡宮・味経宮等がつけられる
飛鳥時代	650(白雉1) 難波長柄豊崎宮造営開始
	652(白雉3) 難波長柄豊崎宮完成
	683(天武12) 複都制の詔、難波は複都に
	686(朱鳥1) 大蔵省から出火、宮室全焼
699(文武3) 持統・文武が難波宮に行幸	前期難波宮
726(神亀3) 難波宮再建に着手	
奈良時代	734(天平6) 難波京で宅地班給(難波宮この頃完成)
	744(天平16) 難波宮が一時皇都に
	756(天平勝宝8) 孝謙難波行幸 難波宮東南新宮に入る
	784(延暦3) 長岡京に遷都
下線は遺構との比定 ができていない宮殿	

2. 難波宮宮殿東方の発掘調査

平成21～23年に行った3回の発掘調査では、難波宮造営に伴って埋められた谷、前期難波宮の掘立柱塀(図中の濃い網)、後期難波宮の建物基壇(薄い網)を発見することができました。

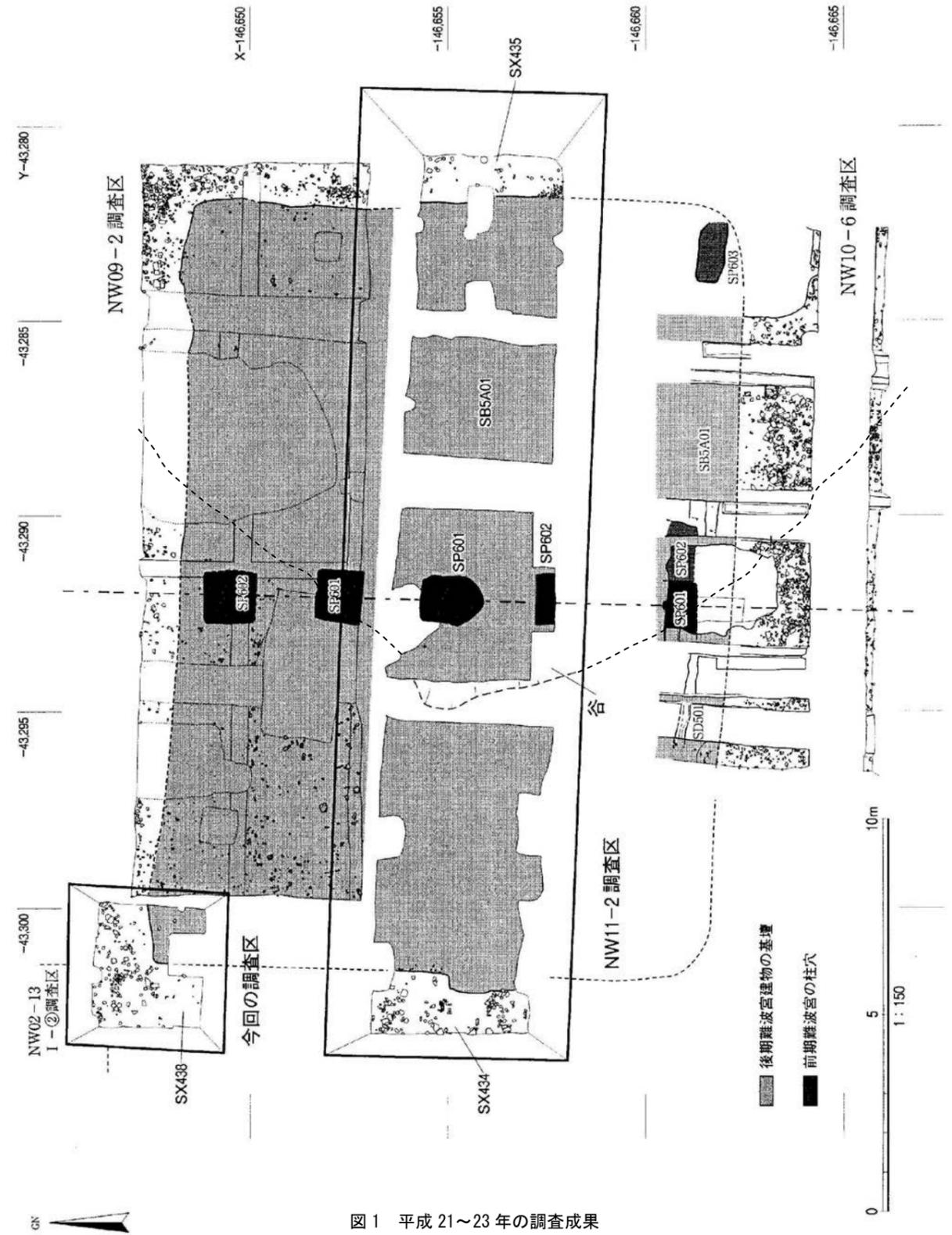


図1 平成21～23年の調査成果

資料 4

2. 難波宮宮殿東方の発掘調査

一a. 前期難波宮の遺構 今回発見された柱穴は5個ですが、直線上 200m 南方でも同様な塀が見つかり、両者は連続するひとつの塀とみられます。この塀は東方官衙群の西を画し、朝堂院東回廊との間は幅 12m ほどの通路状の空地であったと考えられます。宮の中心軸を西へ折り返した位置にも、20 年度の調査で柱列が見つかり、西側も同じ構造になっていたのではないのでしょうか。

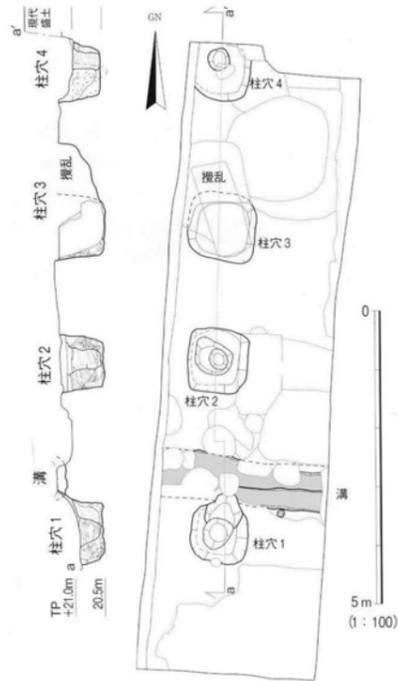


図2 平成20年に朝堂院西方で発見された塀跡

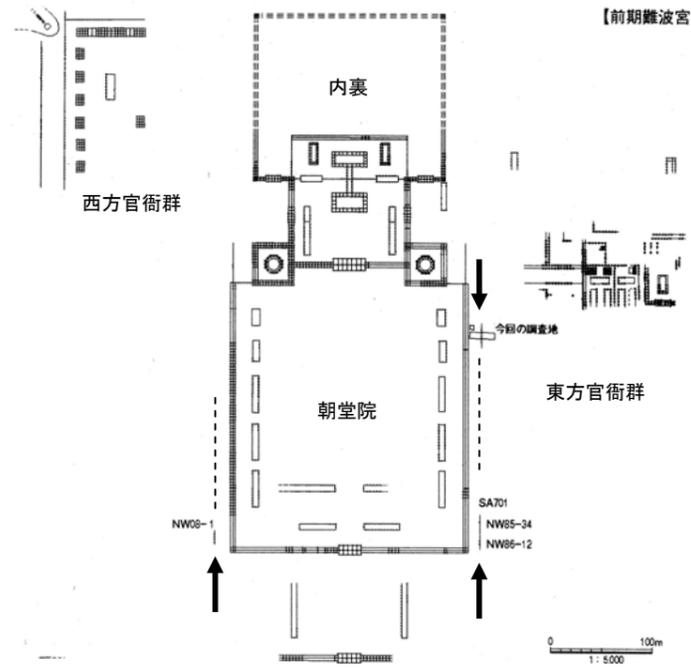


図3 東・西官衙群外郭塀の位置

一b. 後期難波宮の遺構 平成21年の調査で盛土による20cmほどの高まりがみつき、その周りからは瓦が集中して出土しました。建物の基壇の残欠と考えられましたが、翌年の調査でもその範囲を特定できず、基壇かどうかは未解決のままです。23年度の調査では、別のうら（西側）と北西のコーナー一部を発見し、高まりは東西19.5m×南北14.1mであることがわかりました。高まりの落ち際には凝灰岩の破片が出土し、もともとは凝灰岩の地覆石が据えられていたものと考えられました。3年目にして、建物の基壇であることが確かめられたのです。

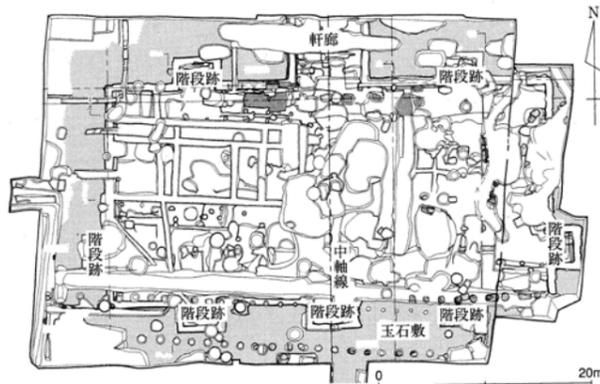


図4 大極殿の検出状況

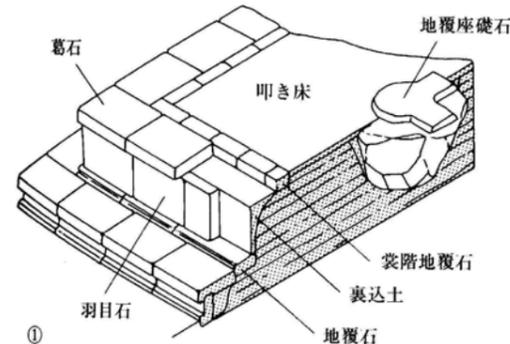


図5 基壇模式図

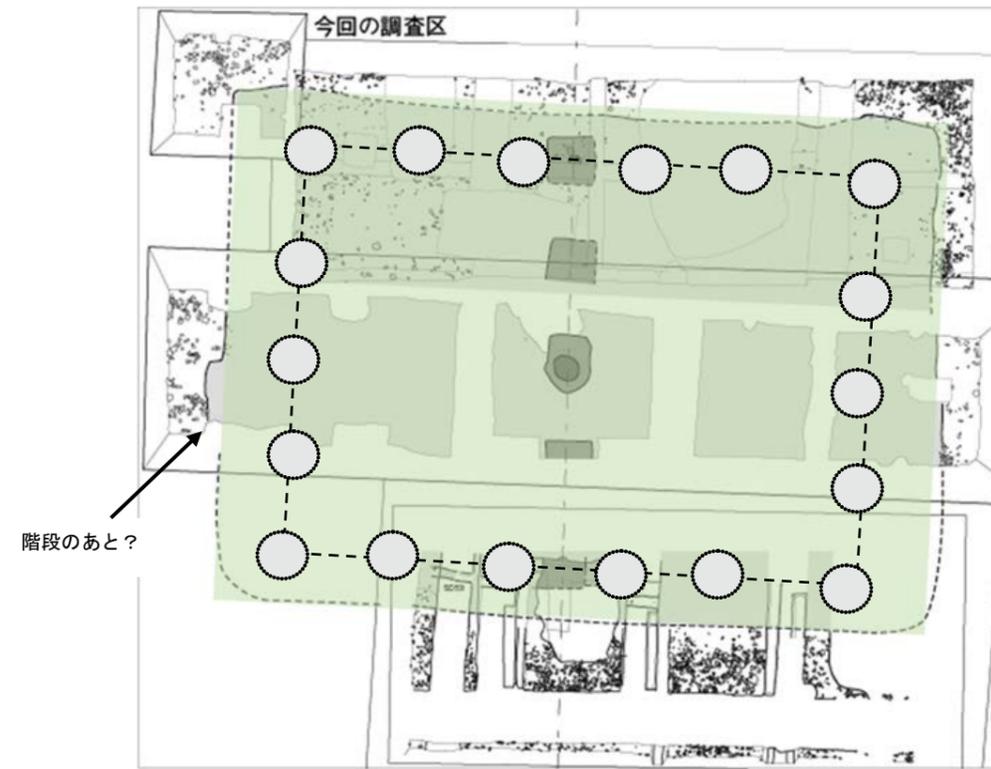


図6 発見された建物の想像図

盛土は外装の地覆石や羽目石等を取り外した基壇の盛土部分だけが残ったもので、さらに、上面は中世の島の耕作によって削られていました。盛土上では柱穴などは検出されなかったので、上屋は掘立柱建物ではなく、礎石建ちで、礎石やその据付け穴も削られてしまったとみるべきでしょう。盛土の規模からみて、間口5間×奥行4間くらいの建物だったのではないのでしょうか。西側の盛土が突出した部分は階段があったのかもしれませんが。

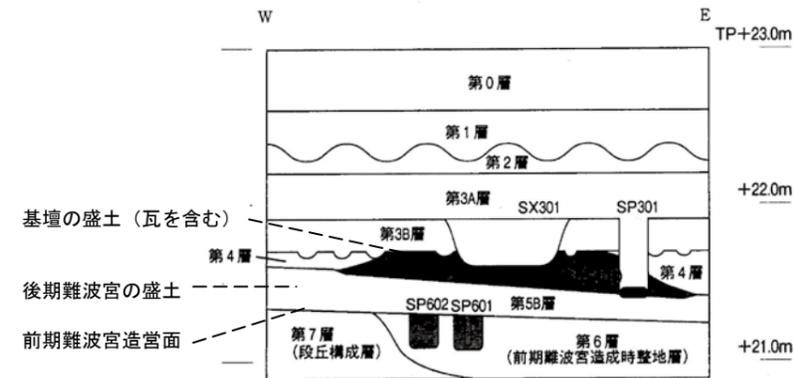


図7 層序模式図



図8 出土した重圏文軒丸瓦

基壇の周りには瓦の破片が散らばっていました。建物を解体したときに散乱したものが残されたのでしょう。瓦は重圏文の瓦当をもち、建物が後期難波宮のものであることを示しています。また、基壇の盛土にも少量ですが瓦片が含まれていました。前期には瓦は使用されず、後期になってから用いられますから、この基壇は後期難波宮の建物を一度こわした後に建てられたことになります。つまり、後期難波宮でも新しい段階の建物ということになるのです。

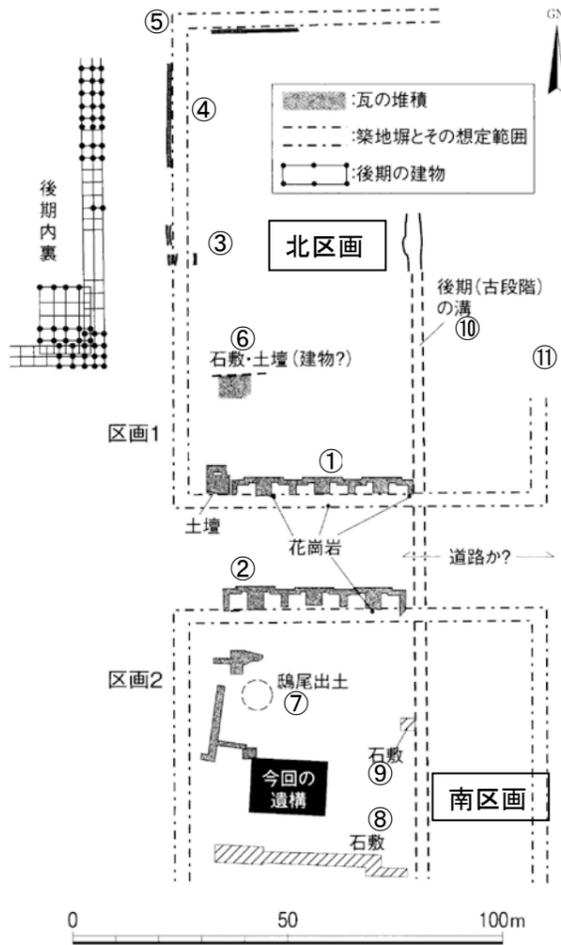


図9 ふたつの築地区画

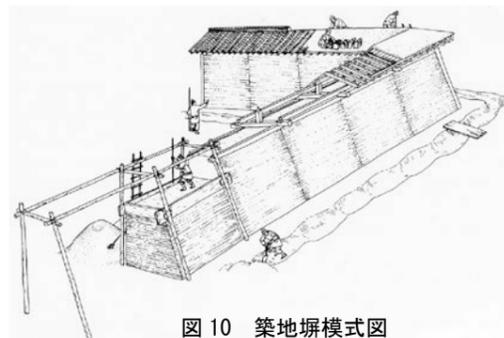


図10 築地塀模式図

3. 後期難波宮の宮殿東方 ～山根博士時代発掘調査との邂逅～

一a. 難波宮発見の地 調査地のすぐ北側（左図⑦）は、1953年、難波宮発見の契機となった鷗尾が発見された地点です。ほかにも、約50年前、山根徳太郎博士によって行われた初期の調査が行われています。

一b. 50年前に発見された遺構との類似 それらの調査と今回の調査でみつかった後期難波宮の遺構には類似した点があります。盛土による基壇をもつこと、その周りに瓦の堆積を伴うこと、先行する後期の遺構の上に築かれていることです。これらの遺構は同じ時期に築かれたものなのではないでしょうか。

一c. 浮かび上がるふたつの区画 …孝謙天皇の東南新宮か

これらの遺構のうち、調査地の北には土壇と瓦堆積が東西に長く連続する地点があります（①・②）。この遺構は築地塀のあととみてよいでしょう。（*）



図11 難波宮発見の契機となった鷗尾(⑦地点)

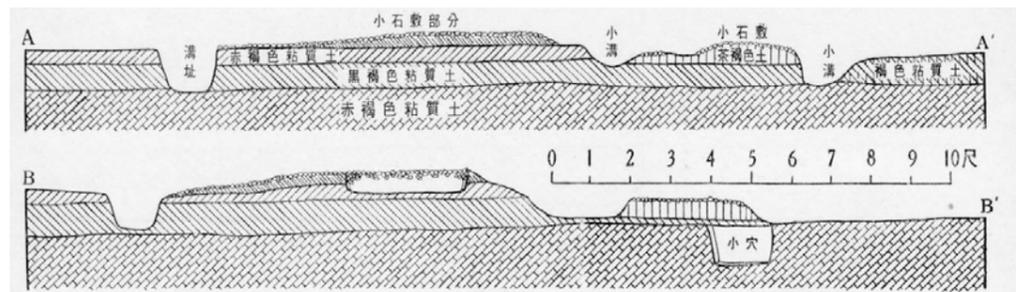


図12 基壇と石敷のようす(⑥地点)



図13 築地塀跡の瓦堆積(⑤地点)

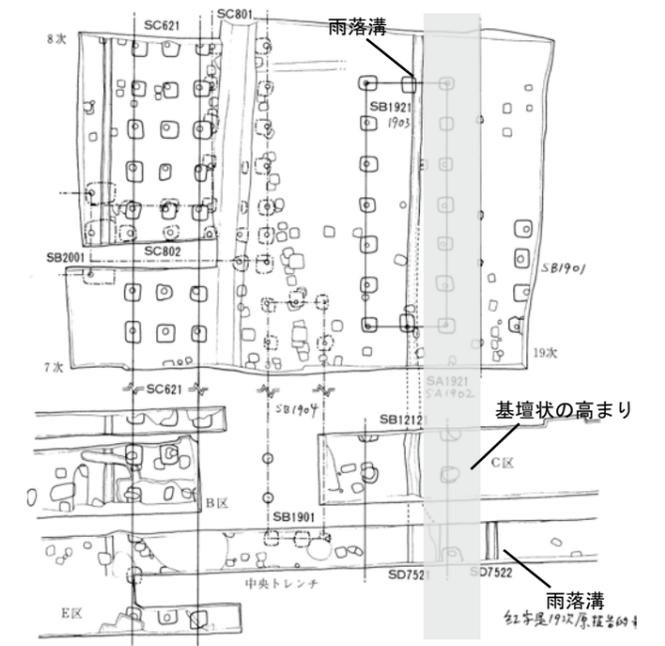


図14 北へ延びる築地塀跡(④地点)

(*) ①地点の築地は西方で曲がり、段状の高まりや雨落溝、瓦堆積を手掛かりに、③・④を経由して北へ延びていることが分かります。⑤地点では再び曲がって東へ延びていきます。⑪地点でも瓦の堆積の報告があり、南北115m、東西85mの区画が復元できそうです(北区画)。区画内部の建物は基壇をもつようです(⑥)。②は別の築地と考えられ、南にも同様な区画があるようです(南区画)。両区画の内部は石敷(⑥・⑧・⑨)が施され、鷗尾が出土する(⑦)などして、相当に格式が高いしつらえがなされていたとみられます。こうした中で、今回発見した建物は、南区画内の西に偏った位置にあります。このことから、区画の中心建物ではなく、付随的な建物になるのではないのでしょうか。そして、鷗尾が出土した位置付近、区画の最も奥まった中央部に中心建物があったのではないのでしょうか。

また、⑨の地点では、石敷が後期の溝⑩を埋めた後に敷かれたことがわかっています。つまり、区画全体が後期難波宮の新しい段階に造成されたとみられるのです。そして、この場所は宮殿からみると天皇の居所である東南にあたります。「東南」にある「新しい宮」。『続日本紀』孝謙天皇の「難波宮の東南新宮」はここを指しているのではないのでしょうか。

4. 後期難波宮の再評価

宮殿中枢部の研究は進んでいるが、周辺の付属施設の検討はまだ少ない。周辺施設の性格付けから難波宮を見直してみたらどうなるのだろうか？

・前期難波宮	西＝倉庫・官衙 東＝官衙・饗宴
・後期難波宮古段階	西＝儀式？饗宴？（高い格式） 東＝何もない？
・後期難波宮新段階	西＝わからない（でも饗宴？） 東＝東南新宮（行宮）



後期難波宮には、一貫して実務的政務を行う場所＝曹司がないのではないのか？外交や儀式に特化した宮殿だったのではないのか？

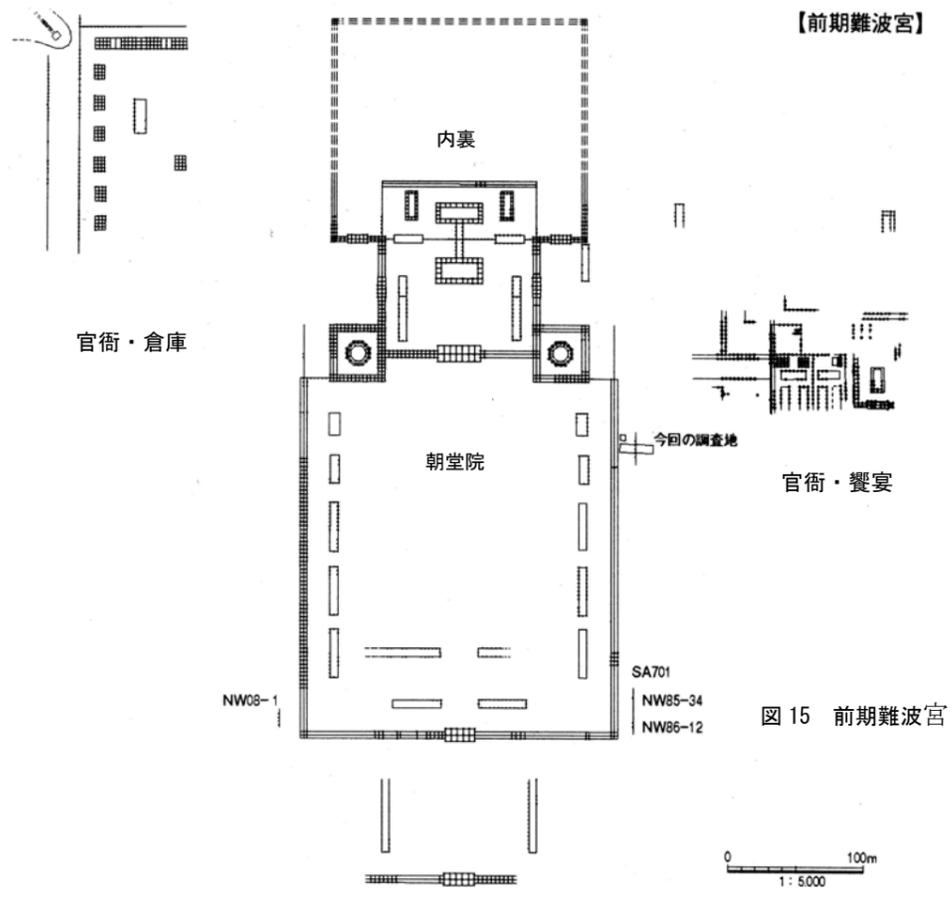
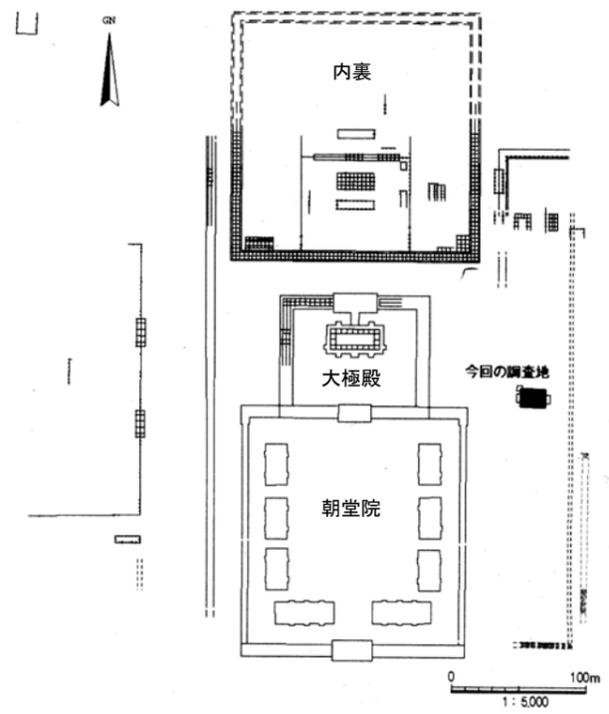


図 15 前期難波宮



【後期難波宮】
 宮殿東方では、後期に2段階があり、築地と溝は同時に存在しないことがわかった。西方にも後期中で遺構の重複があることがわかっており、やはり2段階にわけて考えた方がよい。この図は従来の解釈に基づいている。

図 16 後期難波宮（従来の理解）

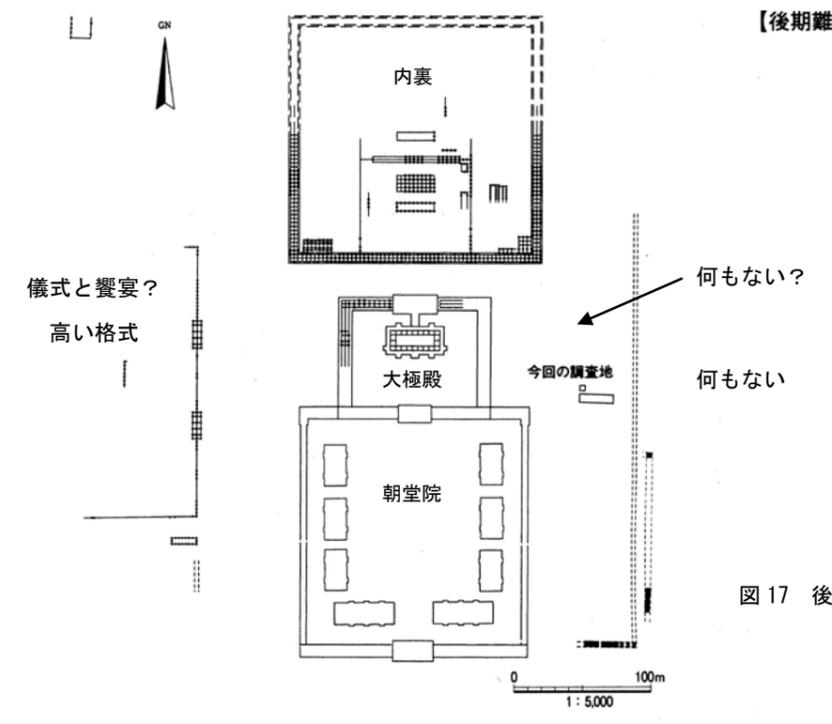


図 17 後期難波宮古段階

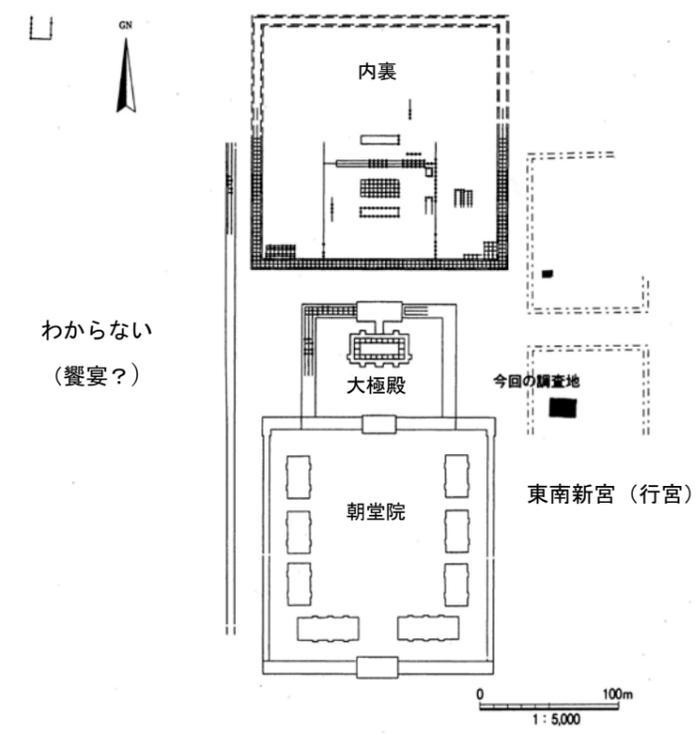


図 18 後期難波宮新段階

紫香樂宮

公益財団法人滋賀県文化財保護協会 大崎哲人

1 紫香樂宮

- 天平12(740)年10月 東国行幸
12月 恭仁宮
- 天平14(742)年2月 恭仁宮の東北道を開く
8月 造離宮司任命
紫香樂宮に行幸(第1回目 9日間)
12月 紫香樂宮に行幸(第2回目 4日間)
- 天平15(743)年4月 紫香樂宮に行幸(第3回目 14日間)
7から11月 紫香樂宮に行幸(第4回目 100日間)
9月 甲賀郡の調庸を畿内に準じた扱いに
10月 大仏造立の詔
東海東山北陸三道の租庸調を紫香樂に納めるよう命じる
寺地を開く(寺院建立の整地を開始)
- 天平16(744)年2月 紫香樂宮に行幸(第5回目 437日)
11月 盧舎那仏の体骨柱が立つ
- 天平17(745)年1月 「新京」と称し、宮門に大楯槍が立つ(→甲賀宮)
4・5月 紫香樂宮周辺で山火事や地震相次
諸司官人・僧に都を置くべき所を聞く
平城宮に還都
6月 平城宮の宮門に大楯が立つ
10月 「造甲賀寺所」
- 天平19(747)年1月 「甲賀寺造仏所」
天平勝宝3(751)年 「甲賀宮国分寺大工家」
延暦4(785)年11月 近江国分寺焼失

2 紫香樂宮跡

◆ 宮跡

◇ 宮町遺跡

- 昭和40年代のほ場整備事業で柱根が出土
年輪年代測定法で天平15(743)年秋に伐採したことが判明
- 昭和58年度から発掘調査を継続実施
- 朝堂と見られる大型建物群 正殿と2棟の脇殿
- 離宮造営計画の変更 後殿の建築中止と内裏区画の整備
- 墨書土器 「御厨」など
- 木簡 荷札・付札・帳簿・和歌木簡・習書・削り屑など、7,000点以上
「造大殿所」「削り屑」「皇后宮職」「習書」
「外西門籍」

◆ 寺院跡

◇ 史跡紫香樂宮跡 内裏野地区

- 礎石の存在と「内裏野・寺野」地名を根拠に宮跡として指定
→ 測量調査などにより寺院跡であることが判明
東大寺式伽藍配置 甲賀寺を引き継いだ近江国分寺の可能性

◆ 官衙・道路跡

◇ 新宮神社遺跡

- 宮殿と寺院を繋ぐ2条の道路(推定道幅約12m)、橋脚、官衙建物、井戸
橋脚の部材 天平16(744)年伐採
荷札木簡 〈上総国山辺郡 [] □ [] 天平16(744)年10月〉

◇ 北黄瀬遺跡

- 大型井戸跡 一辺1.8m四方 横板組み 檜材を鉄釘で固定
付属の堰状施設の部材 天平15(743)年伐採の檜材
周囲に関連の施設がなく、建設整備途中の官衙の可能性

◆ 銅製品鑄造工房跡

◇ 鍛冶屋敷遺跡

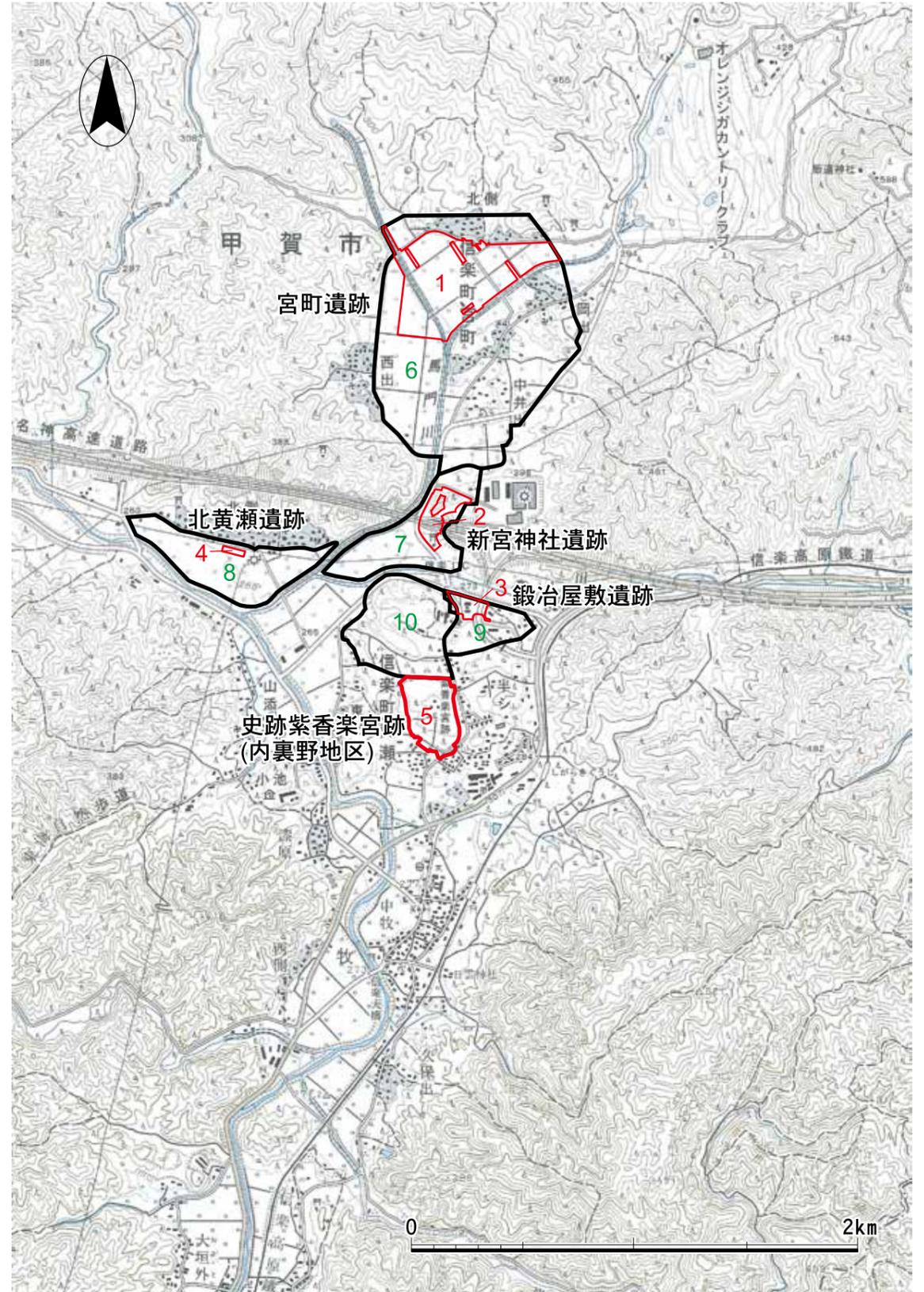
- 第1段階 官衙建物とその付近での銅の精錬
- 第2段階 大規模な鑄造工房群による中型銅製品の鑄造
- 第3段階 大型製品(梵鐘・仏像台座)の鑄造
- 墨書土器「二竈領」・鉄鉢形土器の出土

資料5

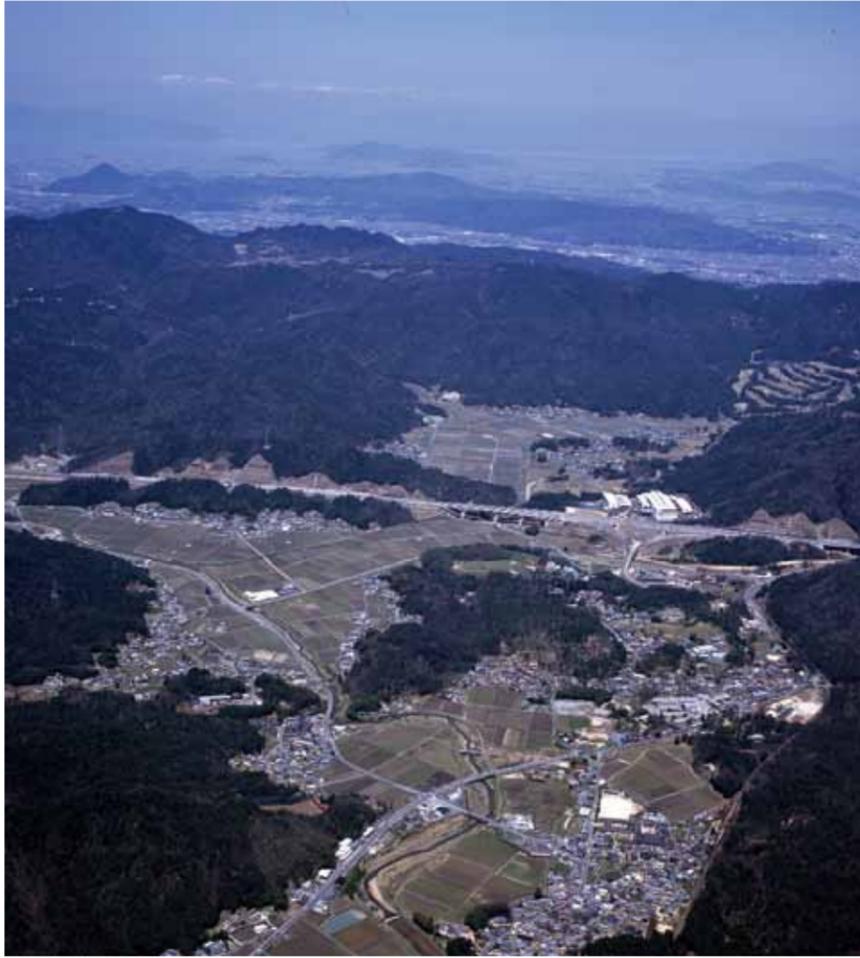


天平12年(740)
 10月 平城宮を發ち東国行幸
 12月 恭仁宮に遷都
 天平13年(741)
 3月 国分寺建立の詔
 天平14年(742)
 2月 恭仁から紫香楽への東北道を開く
 8月 紫香楽宮に行幸(第1回目 9日間)
 12月 紫香楽宮に行幸(第2回目 4日間)
 天平15年(743)
 4月 紫香楽宮に行幸(第3回目 14日間)
 7~11月 紫香楽宮に行幸(第4回目 100日間)
 9月 甲賀郡の庸調を畿内に準じた扱いとする
 10月 大仏造立の詔
 東海・東山・北陸三道の租庸調を紫香楽に納める
 よう命じる
 寺院建立の整地を開始「寺地を開く」
 12月 恭仁宮の造宮停止

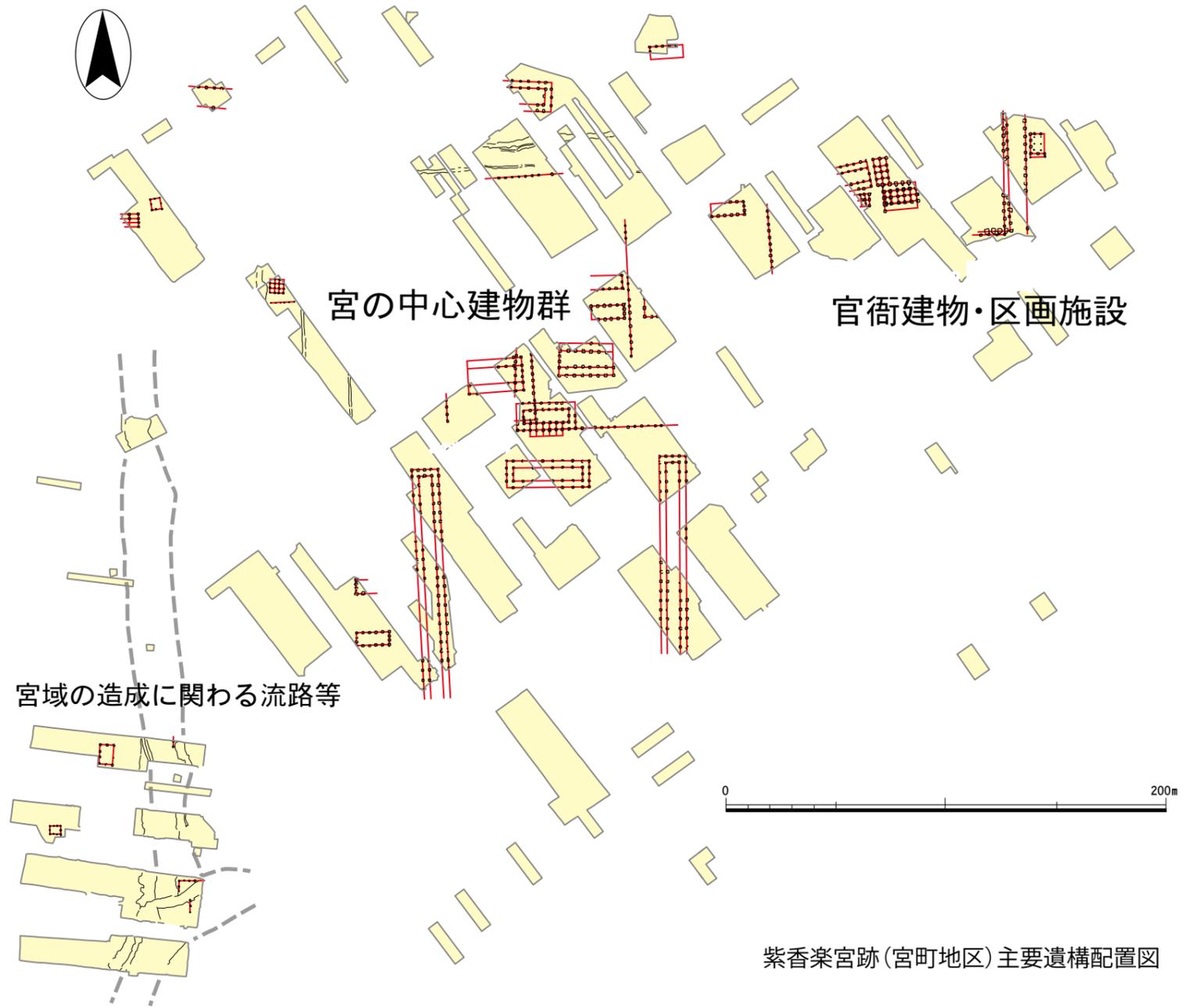
天平16年(744)
 2月 紫香楽宮に行幸(第5回目 ~翌5月 437日間)
 天皇不在の中、難波宮を皇都とする勅
 3月 紫香楽宮で大般若經の転読
 11月 盧舎那仏の体骨柱を建て、天皇自ら繩を引く
 天平17年(745)
 1月 紫香楽宮を「新京」と称し大楯檜を宮門に立てた
 4・5月 紫香楽宮周辺で山火事や地震相次ぐ
 5月 諸司官人・僧に都を置くべき所を聞く
 恭仁を経て平城宮に戻る
 6月 平城宮の宮門に大楯を建てる
 ◇平城還都後の紫香楽
 天平17年(745)10月 「造甲可寺所」
 天平19年(747)1月 「甲可寺造仏所」
 天平勝宝3年(751)2月 「甲賀国分寺大工家」
 延暦4年(785)11月 近江国分寺焼失



1~5 史跡紫香楽宮跡
 (1 宮町地区 2 新宮神社地区 3 鍛冶屋敷地区 4 北黄瀬地区 5 内裏野地区)
 6 宮町遺跡 7 新宮神社遺跡 8 北黄瀬遺跡 9 鍛冶屋敷遺跡 10 東山遺跡



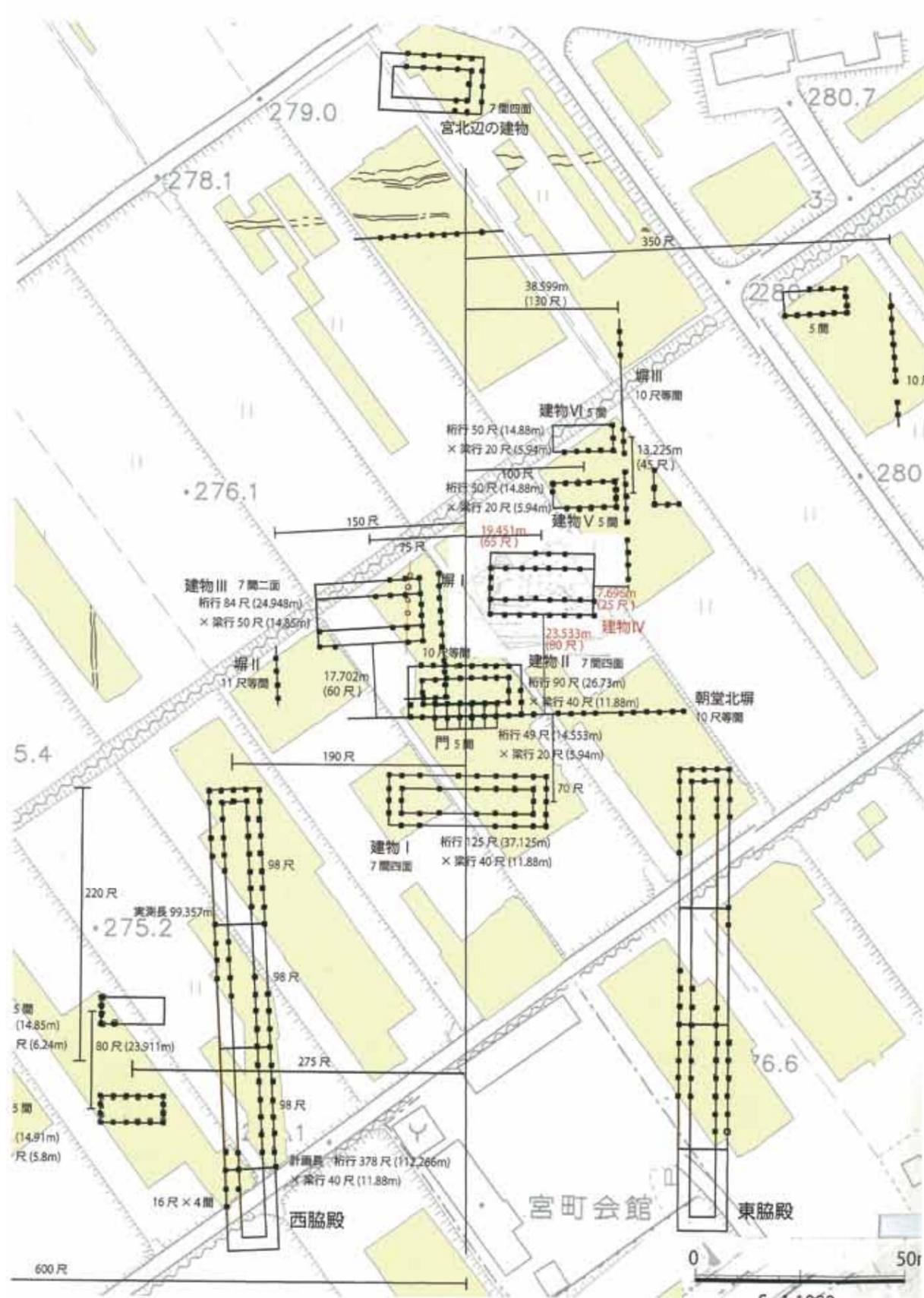
紫香楽宮跡遠景
(南から)



紫香楽宮跡(宮町地区)主要遺構配置図

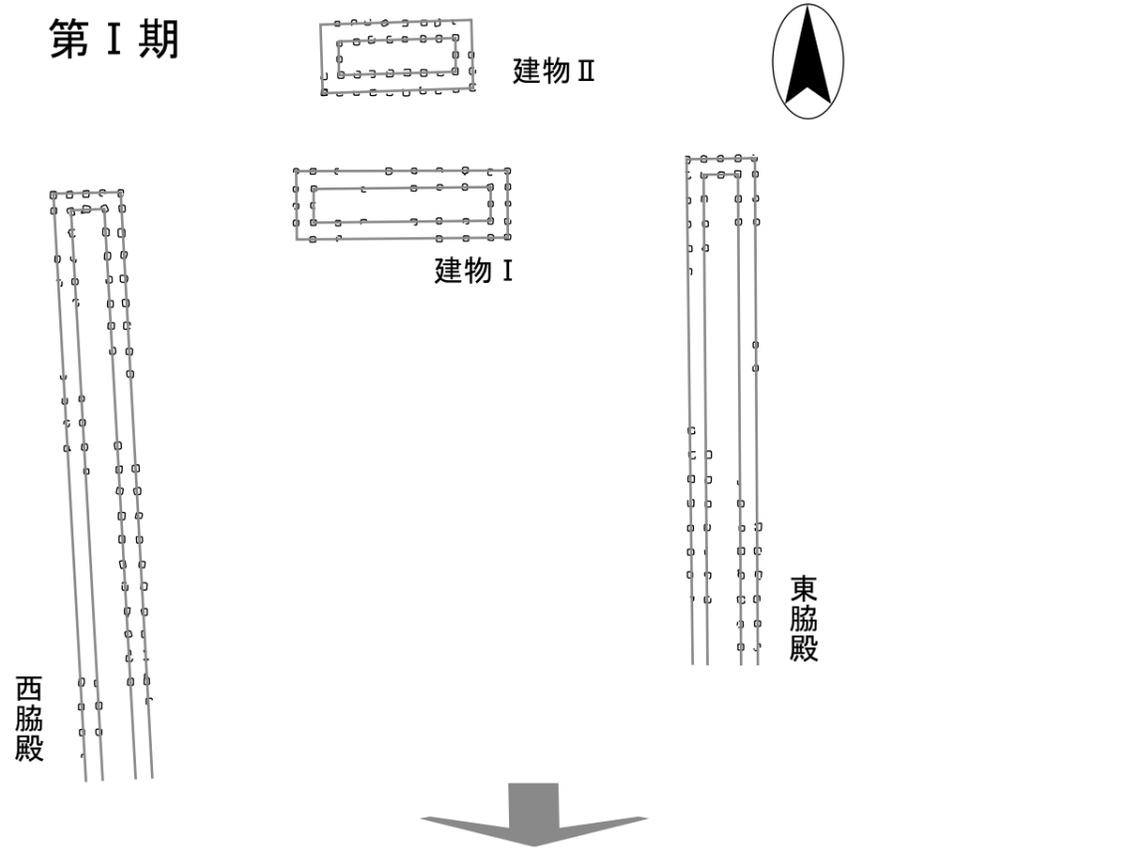


史跡紫香楽宮跡位置図

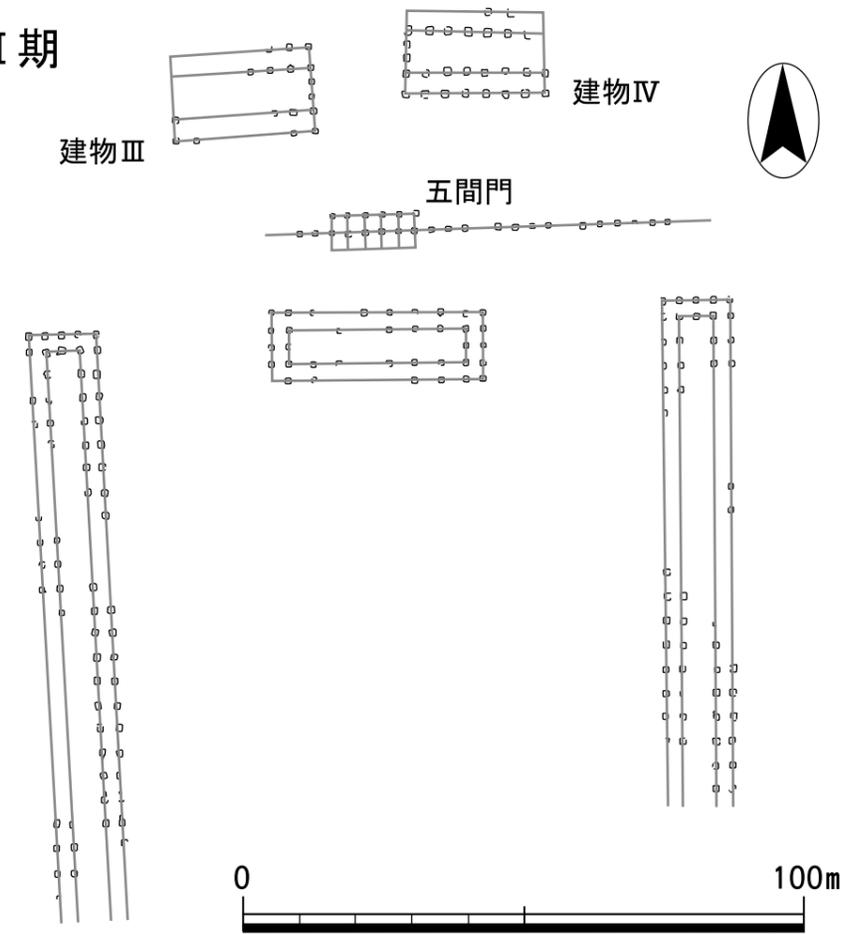


紫香楽宮跡(宮町地区)主要遺構配置図(中心建物群周辺)

第Ⅰ期



第Ⅱ期



紫香楽宮跡(宮町地区)主要遺構変遷図

長岡宮

公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 中島信親

はじめに

長岡宮は延暦三（784）年に奈良の平城京から遷都し、延暦十三（794）年に平安京へ遷都するまでの10年間、京都府向日市周辺におかれた宮都です。短命でしたが、桓武天皇の理想を実現するため初めて山背国に造られた都です。今回は大極殿・朝堂院、内裏といった中枢部の重要施設を中心に、長岡宮の構造について紹介します。

1 地形

「長岡」の名前のとおり、南北に続く丘陵（向日丘陵）の先端付近に位置します。丘陵の西側は小畑川によって削られ切り立った崖状ですが、東側は緩やかに傾斜しており、その中で比較的高くかつ広い平坦面が確保できるところに大極殿・朝堂院が配置されました。そして周囲の段丘中位面（M面）・低位面（L面）を階段状に造成し（ひな段造成）、内裏や諸官衙を造営しました。向日神社や元稲荷古墳・五塚原古墳などの前期古墳が位置する最高所（段丘高位面（H面））は、長岡宮の西端にあたりますが、宮城大垣などは造られなかったと思われます。

2 宮の四至

長岡宮ではこれまでに約500回の発掘調査が行われていますが、宮の範囲のうち北と南の端は確定できていません。平安宮は、北は一条大路（北京極大路）、南は二条大路（東西は東・西一坊大路）で区画される、南北10町、東西8町の範囲ですが、長岡宮の場合、北京極大路と想定していた道路が小路の幅（約9m）で確認されたこと、二条大路は朝堂院のすぐ南を通過し、最近の調査では路面上に平安宮翔鸞楼に相当する楼閣が配置されていたことがわかりました。そのため複数の復原案が提示されています。

a）北一条大路～二条大路間の8町から北京極大路～三条条間小路の12町へ拡張（山中2001）

b）一条大路～三条大路の8町（國下2007・梅本2010）

c）一条条間南小路？～三条条間南小路の8町（網2007）

東西はいずれも東・西一坊大路間の8町で復原されています。南北が確定できない理由には宮城門が確認できていないことがあります。今後、門が推定される地点を計画的に調査していく必要があります。

3 大極殿院・朝堂院

大極殿院は、大極殿・後殿（小安殿）の2つの殿舎と、それを取り囲む回廊から成り立ちます。回廊には南北に門が取りつきます。大極殿院の構造の特徴は、a 後殿が回廊から独立する。b 南の朝堂院とは回廊によって区画し、大極殿閣門を配置する。c 南半部、大極殿の前面に広い前庭を設けて宝幢を立てるの3点です。a は長岡宮で初めて確認できる構造です。平城宮まで大極殿の北に位置した内裏が東（もしくは西）に配置されたこと、日常の政治の場が大極殿・朝堂院から内裏へ移っていく（内裏聴政）ことがその理由と考えられます。これに対してbは前代から引き継がれた構造です。平安宮では門・回廊がなくなり龍尾壇になります。cの宝幢は天皇の即位式と元日朝賀の儀式に際して建てられました。長岡宮で即位した天皇はいませんので、元日朝賀に宝幢が用いられていたことがわかりました。朝堂院は東西2間×南北7間で東西に廂がつく礎石建物6棟（東西第一～三堂）、東西10間×南北2間で南北に廂がつく礎石建物2棟（東西第四堂）、合わせて8棟の朝堂が東西対称に配置されていました。藤原・平城・平安宮の朝堂院には東西にそれぞれ6棟、合わせて12堂の朝堂が配置されており、八堂形式は長岡宮朝堂院の大きな特徴の一つですが、これはできるだけ早急に造営を進めるため、平城宮の副都であった後期難波宮の朝堂院をそのまま移築したために起こりました。朝堂院地区の出土瓦を見ると、

ほぼ9割が難波宮の軒瓦で占められており移築を裏付ける証拠となります。南端中央には南門が位置し、その左右に回廊が取りつきます。回廊は門から8間目で南へ折れ曲がり、先端に楼閣が配置されていました。門の前面に左右対称の位置に楼閣建物を配置する構造を門闕といい、古代中国では重要な門に用いられていました。日本では平安宮応天門（朝集殿院南門）の左右でのみ確認されていました。門の位置はやや異なりますが、長岡宮で確認されたことはこの構造が長岡宮で初めて用いられ、平安宮応天門に引き継がれたことがわかりました。応天門左右の楼閣の名称（翔鸞楼・栖鳳楼）から、唐大明宮の含元殿に強い影響を受けたことがわかります。なお東西と大極殿回廊・南門から延びる回廊までの間は築地によって区画されていました。

4 内裏

長岡宮の内裏は遷都当初に造営された「西宮（第一次内裏）」から延暦八（789）年二月に「東宮（第二次内裏）」、そして平安京遷都が決まった延暦十二（793）年正月に「東院」へと2度移転します。まず「西宮」については、a 大極殿の北に位置する説とb 大極殿西側の「東宮」とほぼ対称の地点に位置する説があります。bでは近年掘立柱の回廊が確認されました。aは平城宮以前の諸宮の配置を引き継ぐことを前提とし、小字「荒内」（荒れ内裏に由来するか？）から推定されていました。しかし明確な遺構は確認できておらず、軒瓦の出土も少ないこと、大きな開析谷が位置するなど地形的な制約が大きいことから否定的な見解が多くみられます。bでは、確認された回廊は柱間10尺の複廊で、東へ折れ曲がる様子が確認できました。柱間10尺の掘立柱回廊は後期難波宮内裏など内裏に相当する施設にのみ用いられており、大極殿・朝堂院と同じく後期難波宮の資材を用いて建造された可能性が高くなりました。しかし回廊内部（内郭）の構造については全く不明なこと、復原した内郭は東へ大きく傾斜（東西で長岡京期の遺構検出面レベルが3.6m低い）していること、出土した軒瓦は難波宮式が5割、平城宮式が4割で、大極殿・朝堂院のようにそのまま移建したとは考えがたいことなどから、まだ確定したとはいえない状況です。次に「東宮」については、大極殿の東、ひな段を一段下がった地点で正殿（平安宮内裏の紫宸殿に相当）、東脇殿（春興殿）などの殿舎、内郭を区画する築地回廊が確認されています。中央やや南寄りに正殿および脇殿を、北半に後宮の諸施設、東西の端に内廷官司の建物が配置されていました。この配置は光仁・桓武朝の平城宮内裏、そして平安宮内裏と共通する構造です。桓武天皇は多くのキサキをもっていたため、後宮の整備は必要不可欠のことだったのでしょう。「東院」は左京北一条二・三坊に位置しており、今回は詳しく触れませんが、正殿・脇殿の構造が平安宮内裏に酷似することが確認されています。

5 他の宮内諸施設

この他平安宮には、大極殿・朝堂院の西に儀式・饗宴用の施設である豊楽殿、内裏の東に皇太子の居所である東宮・春宮坊、宮城の北端に大蔵が配置される他、二官八省およびその被管官司の曹司（役所）が置かれていました。また平城宮では、離宮や苑池などがあったことが確認されています。長岡宮では、まず豊楽殿に相当する施設は確認されていません。大極殿・朝堂院の西側は難波宮式を中心とする軒瓦が多量に出土する地点ですが、顕著な遺構はあまり見つかっていません。春宮坊については、内裏の東側で、宮と京の境である東一坊大路西側溝から東宮坊に関連する木簡や墨書土器が見つかったので、この付近に配置されていたと考えられます。大蔵についても北辺地区で築地に囲まれた礎石建物の倉庫や池・石組み溝が確認されています。この他官衙政庁の一部と思われる廂を持つ大形礎石建物が数棟確認されています。これらは大極殿・朝堂院を取り囲むように西および南側に位置します。最近行われた長岡宮跡第483・485次調査では、大極殿の北方で南北棟の大形礎石建物が確認されました。

資料6

6 まとめ

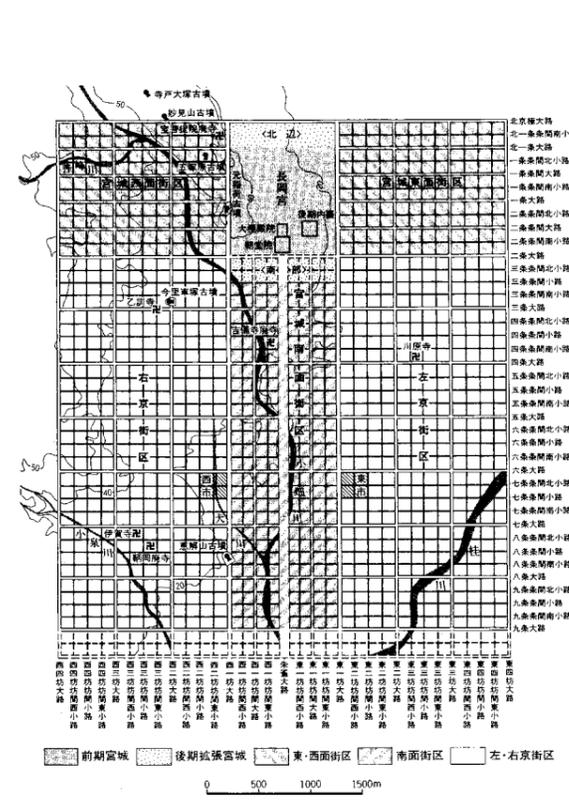
長岡宮諸施設の構造、特に大極殿・朝堂院や内裏の構造をみると、新たに創出されたもの（大極殿後殿の分離、楼閣建物の造営、内裏の分離など）と伝統を引き継ぐ部分（大極殿閣門の設置、内裏内郭の構造など）が共存する様子が確認できます。まさに変革期の宮といえます。新たに創出されたものには当時最先端であった中国・唐の影響が色濃く反映されています。宝亀八（777）年、あるいは宝亀十（779）年の遣唐使によってもたらされた大明宮など唐の宮殿の情報をもとに、桓武天皇は新たな王統にふさわしい宮を長岡宮で造営したと思われます。

参考文献

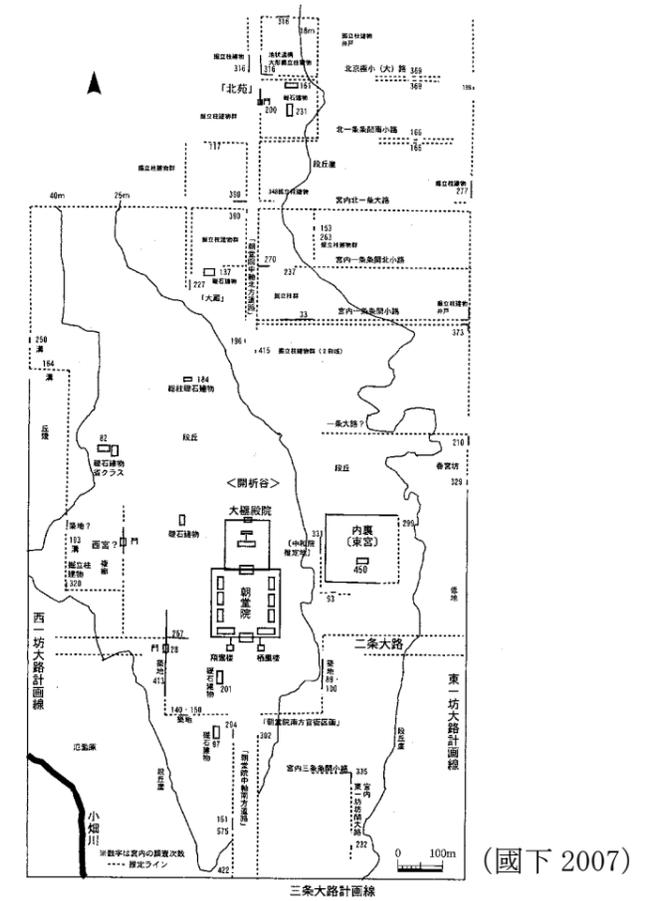
- 網 2007 網伸也「平安宮の造営—古代都城の完成—」『都城—古代日本のシンボリズム』青木書店 2007年
- 梅本 2010 梅本康広「長岡京」『恒久の都平安京』古代の都3 吉川弘文館 2010年
- 梅本他 2010 梅本康広・初村武寛・津野仁「長岡宮跡第472次(7ANEHI-8地区)～第二次内裏正殿地区東脇殿、内裏下層遺跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第84集 向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター 2010年
- 國下・中塚 2003 國下多美樹・中塚良「長岡宮の地形と造営～丘と水の都～」『財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城』14 2003年
- 國下 2007 國下多美樹「長岡京～伝統と変革の都城～」『都城—古代日本のシンボリズム』青木書店 2007年
- 國下・松崎他 2011 國下多美樹・松崎俊郎・中島信親・吉野秋二・山岸常人「長岡宮推定「西宮」 向日市埋蔵文化財調査報告書」第91集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2011年
- 松崎 2007 松崎俊郎「長岡宮跡第444・445次(7ANFMK-22・23地区)～朝堂院南面回廊・「翔鸞楼」、乙訓郡衙跡、山畑古墳群～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第75集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2007年
- 向日市埋文セ 2003 (財)向日市埋蔵文化財センター編「長岡宮域地形図・遺構分布図」『財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城』14付図 2003年
- 山中 2001 山中章「長岡京東院の構造と機能—長岡京『北苑』の造営と東院—」『日本史研究』461 日本史研究会 2001年



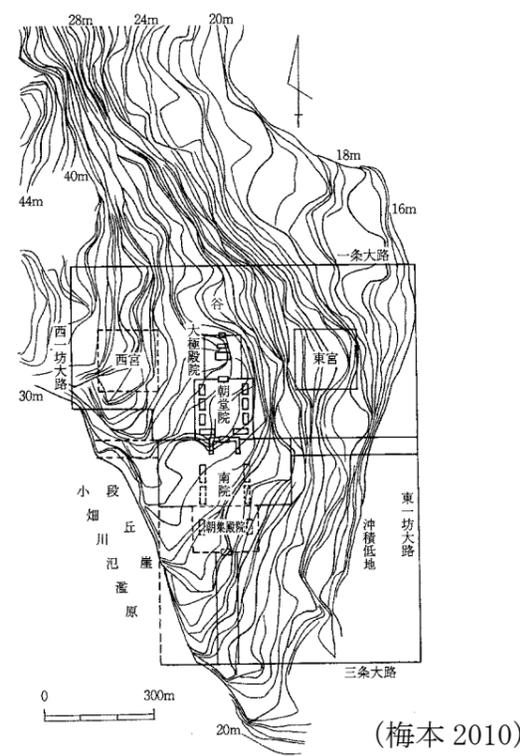
第1図 長岡宮の地形 (國下・中塚 2003)



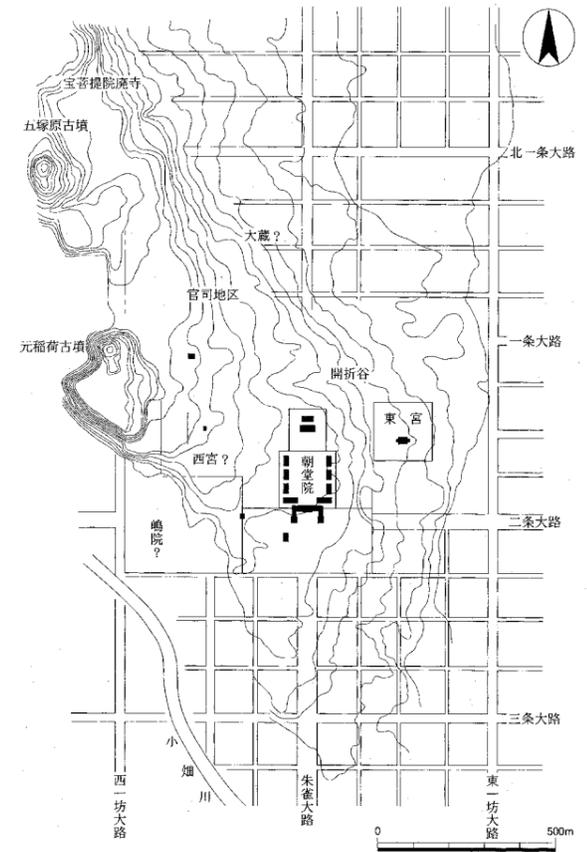
(山中 2001)



(國下 2007)

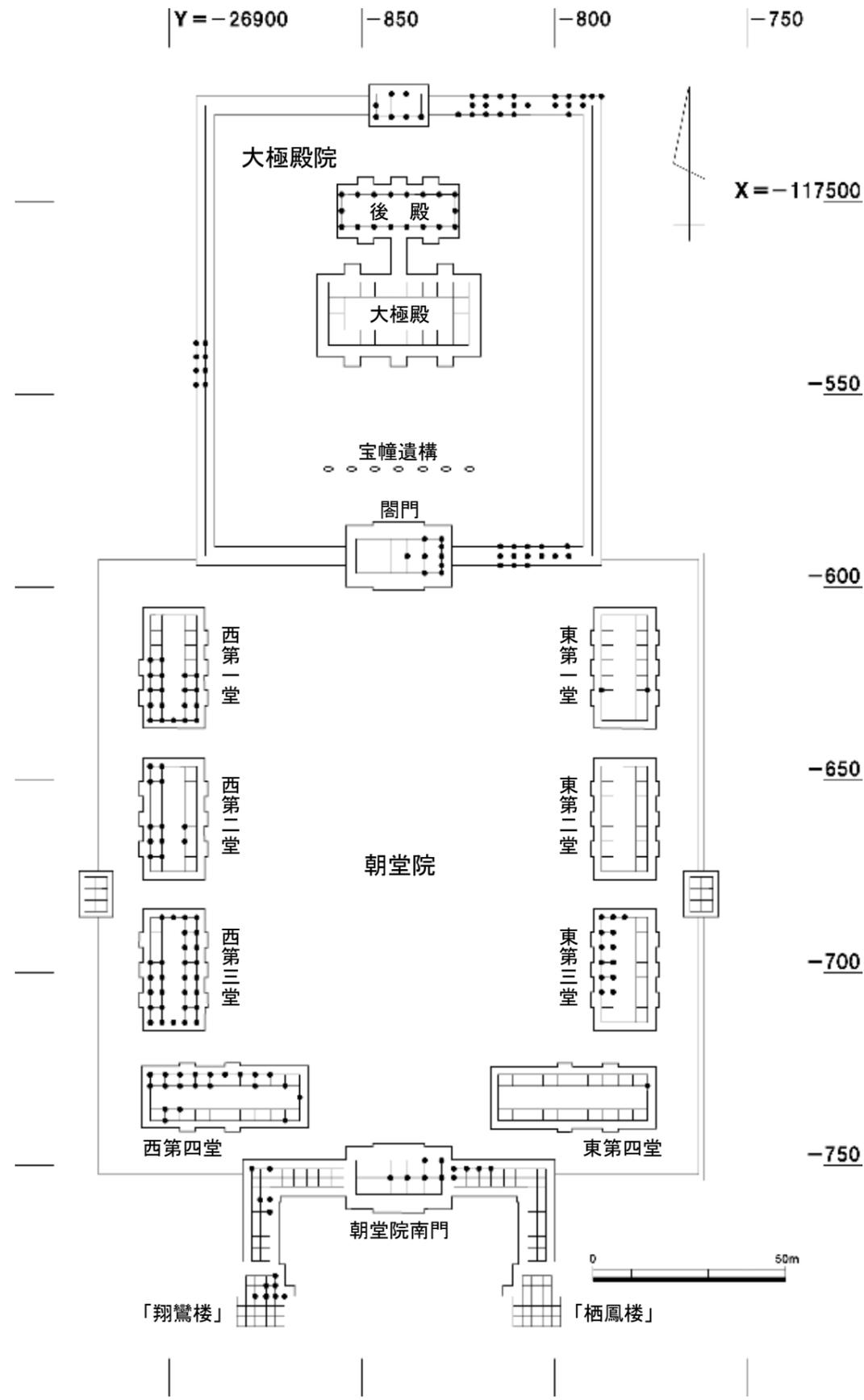


(梅本 2010)

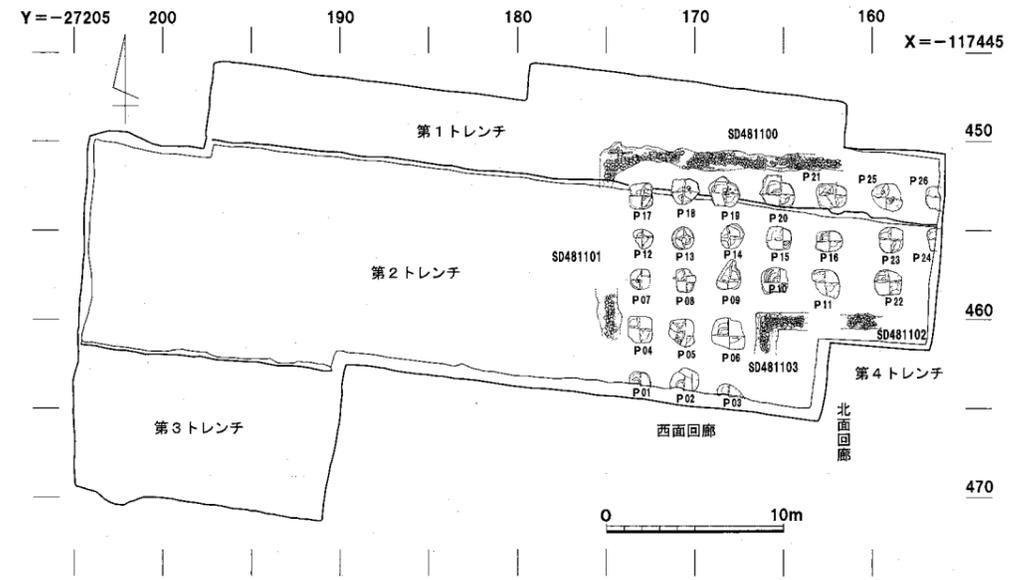


(網 2007)

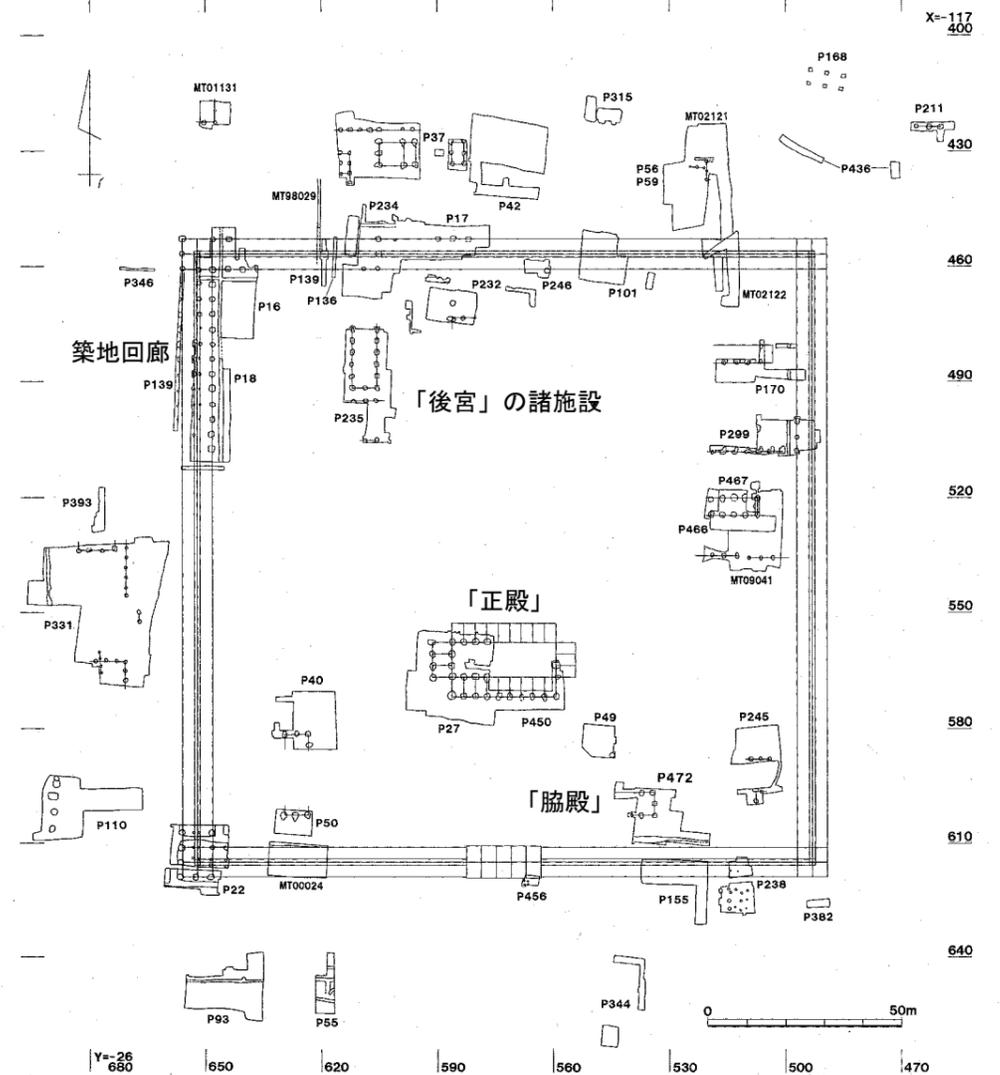
第2図 長岡宮域復原案



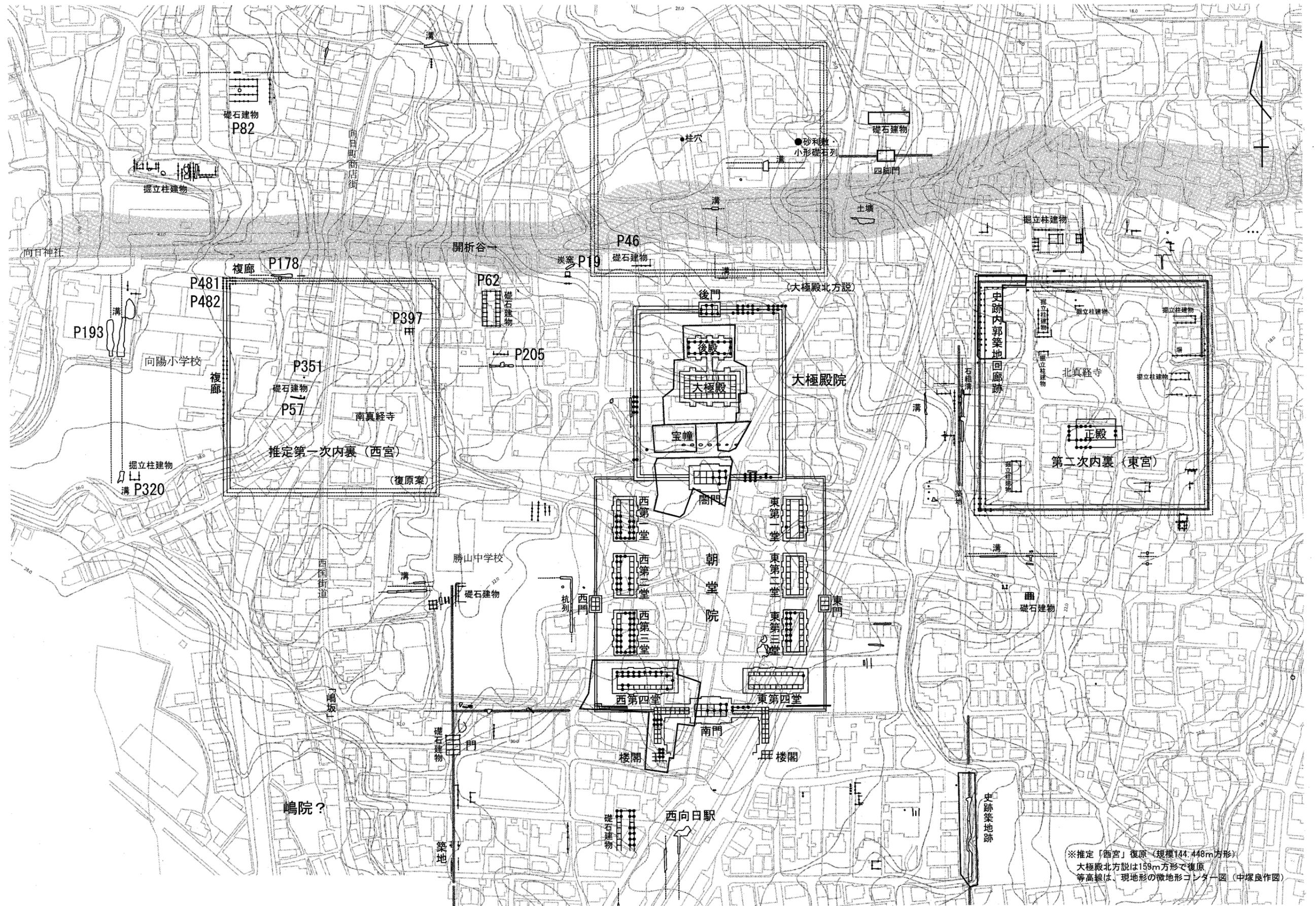
第3図 大極殿院・朝堂院復原図 (松崎 2007)



第4図 「西宮」掘立柱回廊北西隅 (國下・松崎他 2011)



第5図 「東宮 (第二次内裏)」の遺構配置 (梅本他 2010)



第6図 長岡宮遺構分布図・「西宮」復原図(國下・松崎他 2011)

平安宮の構造

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 上村和直

はじめに

考古学的成果から、平安時代前期の平安宮の実態を明らかにし、構造について考える。

1. 平安宮の完成度

(1) 発掘調査の成果

平安宮内では、これまでの約1800件の調査が行われ、その内、平安時代前期の遺構は約100箇所で見出している。〔図4〕

- ◎ 中央部…大極殿・同回廊、朝堂院・同回廊、豊楽殿・清暑堂・栖霞楼など
- ◎ 内裏関係…蔵人(所) 町屋・承明門・内郭回廊・外郭築地など
- ◎ 官衙関係…太政官・中務省・民部省・造酒司・内酒殿など
- ◎ 宮内道路・宮城大垣…西側の隄など
- ・ 最近の調査をあげておく。〔図1～3〕
- ⇒これまでの調査で見出した遺構数は少なく、遺構だけで平安宮を復元することは困難である。〔図5・6〕 ⇔平城宮・長岡宮と比べる

(2) 伝存された宮城図の検証

- ①『南都所伝宮城図残欠』…成立年代不明、大同年間統廃合orその後〔図10〕
- ②『九条家本(延喜式) 付図 宮城図』…12世紀頃に作成〔図8〕
- ③『陽明文庫本宮城図』…元応元年(1319)に転写…内裏再建用の指図〔図9〕
- ◎ つまり、宮城図は同時代図ではない。
- ⇒『宮城図』が無かったら、どこまで復元できるか? →ほとんど分かっていない平安宮。
- ⇨平安京の施工状況は『京城図』と異なる。⇒平安宮はどこまで施工されたか?

2. 平安宮の造営プロセス

文献史料を時期・地域に分けて表にしてみると〔表1〕

- ① 延暦11年(792)～延暦13年(794) …長岡京期の後半から遷都の準備が始まる
宮城周囲の大垣・宮城門・内裏などの造営…長岡宮からの移築が主体
- ② 延暦13年(794)～延暦15年(796) …大極殿・朝堂院や主要施設などを造営…新造が主体
- ③ 延暦15年(796)～大同3年(808) …豊楽殿などの造営…新造
- ④ 大同年間以降…大同3年(808)頃の官衙の統廃合、朝堂院の修理、官衙施設の再建
⇒宮城内は変化している…施設の改造、官衙の位置の変化
→いつの時点の「平安宮復原図」か?

3. 平安宮の構造

(1) 宮城内の区画

宮城内を大まかに二つのエリアに分ける…藻壁門と待賢門のラインで北半と南半

- ◎ 北部地域…内裏、内裏関係の官衙・施設と、大蔵などの地域
⇨中国都城の宮城(皇帝の居所と関連機関)に相当する。

- ◎ 南部地域…儀式と行政官衙地域
⇨中国都城の皇城(国政機関の官庁街)に相当する。

(2) 宮城内の配置

宮城内を構成する諸機関を、機能によって細分する。

- ① 北辺官衙地区…倉庫群及び大蔵省関係の官衙などの地区
- ② 内裏地区…内裏及び内裏関係の官衙(内庭官司)
- ③ 朝堂院・豊楽院地区…国家的な儀式と饗宴施設の地区
- ④ 東辺官衙地区…警備関係の官衙が主体の地区
- ⑤ 西辺官衙地区…警備関係の官衙が主体の地区
- ⑥ 南東官衙地区…行政官衙地区、太政官・中務省・宮内庁など主要官衙が集中
- ⑦ 南西官衙地区…治安警察官衙が主体の地区
⇒官衙は機能的に応じて配置され、計画的に設置されたと考えられる。

4. 平安宮の特質

(1) 平安宮の特徴

- ◎ 宮域・京城の造営基準線が一致 → 宮域・京城の造営計画の一体化
 - ・朱雀門・応天門・朝堂院・大極殿・中和院・内蔵寮が南北軸で並ぶ
 - ・中御門大路と朱雀大路の延長中心ライン交点に大極殿が位置
 - ・中和院(中院)が宮域の中心に位置
 - ・ただし、内裏と豊楽院は軸が異なる
- ◎ 朝堂院・大極殿院間の閣門が無く、龍尾壇となる…朝堂院と一体化…儀式の場
 - ・応天門前庭を広くとり、応天門に楼閣が付く。
- ◎ 内裏が朝堂院・大極殿の東北に分離…政議の場が内裏へ移行
 - ・内裏周辺に内庭関連の官衙・施設が集中 → 天皇に直結した空間の成立
- ◎ 豊楽院が朝堂院の西方に分離…饗宴施設が独立

(2) 平安宮の系譜

- ① 前代の都城から継承しなかったもの
 - ・宮城北側の北苑(禁苑)
 - ・太上天皇宮(後院)
- ② 前代の都城から継承したもの
 - ・中軸に朝堂院・大極殿などが位置する。(藤原宮・平城宮・長岡宮)
 - ・朝堂院南門に楼閣が付く。(長岡宮)
 - ・内裏が朝堂院・大極殿の東北に位置する。(長岡宮) …内裏の位置が固定
- ③ 平安宮で新たに創出したもの
 - ・朝堂院閣門が無く、龍尾壇が成立
 - ・豊楽院の成立…平城宮中央四朝堂の継承か?
 - ・宮城門が14門となる。
 - ・中和院(中院)・神嘉殿の成立…内裏での天皇の神事が独立
 - ・内裏西側に宴の松原が位置—内裏の遷地か? or太上天皇宮の予定地か?

表 1 平安時代前期の平安宮及び関連略年表

時期	天皇	長岡京	京外	造宮関連	平安京	平安宮					備考					
						宮域周囲	朝堂院・豊楽院地区	内裏地区	東方官衙	西方官衙		北辺官衙				
長岡京期	桓武	延暦3年(784) 6.10造長岡宮使任命〔統紀〕。11.11桓武天皇長岡宮に移幸〔統紀〕。(長岡宮遷都) 延暦4年(785) 1.1天皇大極殿で朝賀、五位以上内裏で宴〔統紀〕。 延暦8年(789) 2.27西宮から東宮に遷御〔統紀〕。														
		延暦10年(791) 4.18山背國部内諸寺の浮圖修理〔統紀〕。9.16平城宮諸門を壊し運んで長岡宮に移建〔統紀〕。 延暦11年(792) 1.9天皇諸院を巡覧〔紀略〕。 延暦12年(793) 1.21宮を壊すため東院に遷御〔紀略〕。 延暦13年(794) 1.1宮殿を壊し始め、朝賀廃止〔紀略〕。	延暦11年(792) 8.4山城国深草での埋葬が京城に近接したため禁止〔類史〕。 延暦12年(793) 1.15遷都のため、藤原小黒麻呂ら山背國葛野郡宇太村の地を相す〔紀略〕。	延暦12年(793) 3.12新京宮城造宮のため五位・主典以上に役夫を進上させる〔紀略〕。7.25新京を巡覧し、造宮使・将領に衣を賜う〔紀略〕。 延暦13年(794) 6.23諸国の夫5000人を徴発し、新京を掃す〔紀略〕。	延暦12年(793) 3.1天皇葛野に行幸、新京を巡覧〔紀略〕。7.15葛野郡百姓の口分田が都中にあり、代わりの地を班給〔類史〕。9.2菅野真道らを遣わし新京の宅地を班給〔紀略〕。 延暦13年(794) 4.28天皇新京を巡覧〔類史〕。7.1東西市を新京に遷し、塵舎を造り市人を遷す〔紀略〕。	延暦12年(793) 6.23諸国に命じて新宮の諸門を造らせる〔紀略〕。 この頃大極殿造営始まるか？ この頃宮城門と大垣完成か？	この頃内裏造営始まるか？					中心部造営(移建)				
		延暦14年(795) 1.29旧長岡京の地を勅旨の藍圃、近衛府の蓮池に充てる〔類格〕。5.14文室波多麻呂らに長岡旧京を守らせる〔紀略〕。	延暦13年(794) 10.22天皇が新京に車駕を遷す〔紀略〕。10.28遷都詔発す〔紀略〕。(平安宮遷都)	延暦13年(794) 11.8山背國を山城国とし、新京を「平安京」と号す〔紀略〕。造宮司が造京式を貢奏。 延暦14年(795) 閏7.11大風で京中の官舎・家屋が多く破壊〔紀略〕。	延暦14年(795) 1.1大極殿未完成のため朝賀を廃し、前殿で宴す〔紀略〕。8.19天皇、朝堂院の作事を観る〔紀略〕。								中央部造営(新造)			
平安時代前期前葉	806 平城			延暦15年(796) 7.24造宮職の官位を中宮識に准す〔後紀〕。(造宮使から造宮職) 延暦16年(797) 3.17造宮役として遠江などから雇夫24000人を進上〔後紀〕。 延暦24年(805) 12.7徳政相論あり、12.10造宮職を廃止〔後紀〕。 大同元年(806) 2.3造宮職を木工寮に併合〔後紀〕。	延暦15年(796) 7.9天皇南院に御幸〔後紀〕。同年頃から東寺・西寺を造営〔東宝記〕。 延暦16年(797) 8.14地震・暴風により左右京坊門・百姓家屋多く倒壊〔類史〕。 延暦19年(800) 4.9東西二寺の造宮のため巨樹直木の伐採を許す〔類史〕。7.19天皇が神泉苑に御幸〔紀略〕。 延暦23年(804) 8.10暴風のため神泉苑左右閣倒壊〔後紀〕。	大同3年(808) 4.16若犬養門にて鳥が死ぬ。	延暦15年(796) 1.1天皇大極殿に御して朝賀を受ける〔紀略〕。3.25天皇が朝堂及び諸院を巡覧し、近東院に御す〔紀略〕。 延暦16年(797) 1.1大極殿で朝賀、1.17朝堂院で弓射を観る〔紀略〕。 延暦18年(799) 1.7豊楽殿未完成のため、大極殿前龍尾道に仮殿を構えて宴す〔後紀〕。 大同3年(808) 11.15朝堂院にて大嘗之事を行う。豊楽殿で宴す。	延暦23年(804) 8.10暴雨大風、中院西楼倒れる〔後紀〕。 延暦24年(805) 2.6宮中春宮坊で大般若経転読〔後紀〕。	延暦18年(799) 3.1民部省の廩に落雷〔後紀〕。			延暦15年(796) 8.5天皇大蔵省に御幸〔後紀〕。	豊楽院など造営			
				弘仁10年(819) 7.8に修理左右坊城使を停止、修理職を置く〔類史〕。 天長2年(825) に修理職を木工寮に併合〔類格〕。 承和元年(834) 1木工寮から造瓦使造瓦長上を置く。 承和3年(836) 5.23朱雀院造宮のため平城京の建物移築〔統紀〕。	弘仁7年(816) 8.16大風により羅城門倒壊〔紀略〕。8.24天皇が冷然院へ行幸〔類史〕。 弘仁9年(818) 4.27殿閣及び諸門の号を改め、皆この額を題す〔小右記〕。 弘仁6年(815) 1.21朝堂院修理のため尾張などの役夫19800人徴発〔後紀〕。 弘仁2年(811) 2に弁官曹司に遷御。禁中の修造のため。 貞観18年(876) 4.10夜大極殿焼亡、小安殿・蒼龍・白虎楼・延久堂・北門北東西三面廊百余間に延焼〔三実〕。		大同4年(809) 3.24内裏修造の企画あり。 弘仁14年(823) 10.7内裏延政門北掖で出火〔類史〕。 天長3年(826) 1.3左兵衛府厨院失火〔紀略〕。 仁寿3年(853) 2.20天皇梨本院へ移る〔文徳実録〕。	大同4年(809) 5.27大炊寮の蔵焼亡〔紀略〕。 弘仁2年(811) 6.25主殿領益殿自壊する〔後紀〕。 天長7年(830) 10.25御井の半町を中務省厨屋地とする〔類史〕。			大同年間官衙統廃合朝堂院など修理					
807	809 嵯峨 823 淳和 833 仁明 850 文徳 858 清和														第1次大極殿焼亡	
877	中期 876 陽成						元慶元年(877) 4.9大極殿造営の工を始める〔三実〕。									

凡例 統紀：続日本紀、後紀：日本後紀、統後紀：続日本後紀、三実：日本三代実録、類格：類聚三代格、類史：類聚国史、紀略：日本紀略

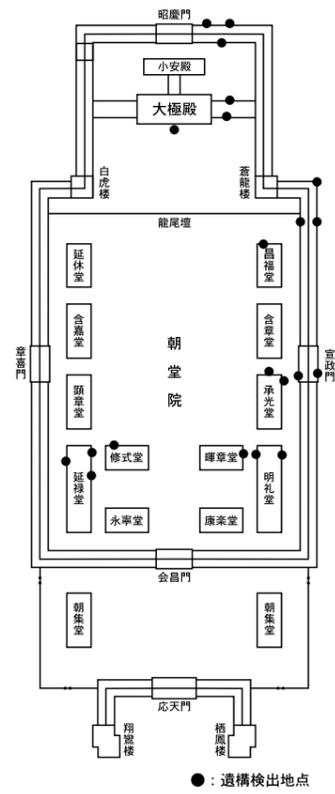
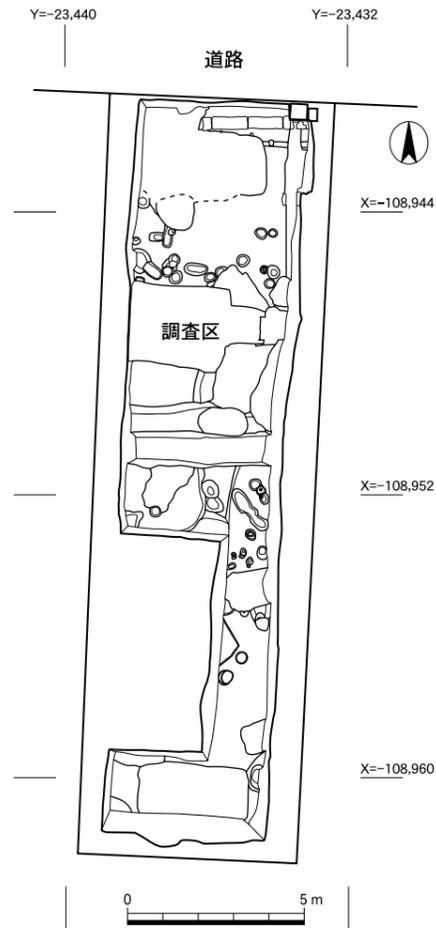


図1 朝堂院昌福堂の調査

〔『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008年〕

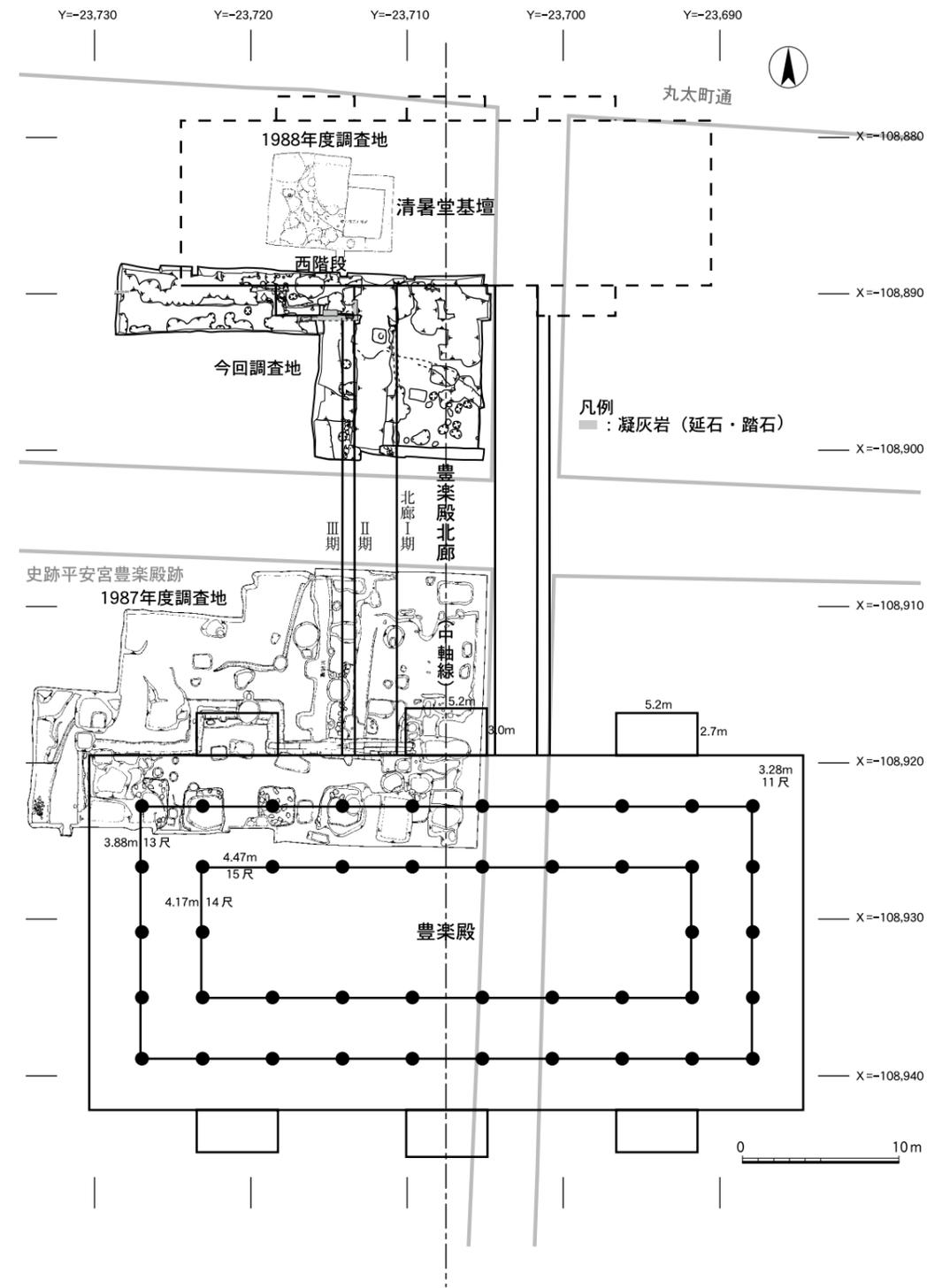


図3 豊楽院豊楽殿・北廊・清暑堂の調査

〔『京都市内遺跡発掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局、2008年〕

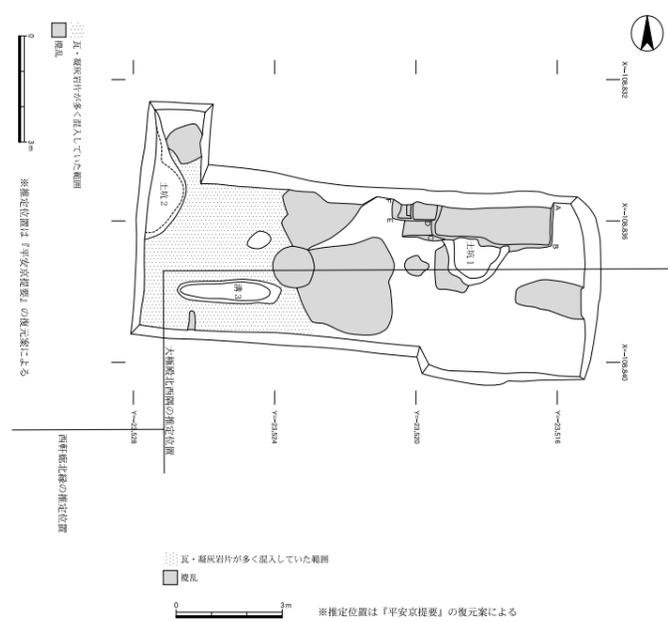


図2 大極殿の調査

〔『京都市内遺跡発掘調査報告 平成22年度』京都市文化市民局、2011年〕

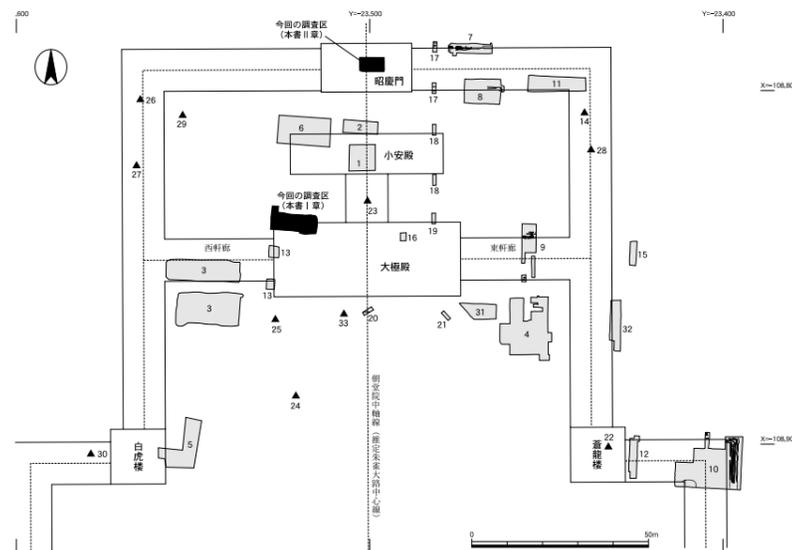




図 4 平安時代遺構検出地点分布図

〔『平安宮 I 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』同研究所、1995年〕

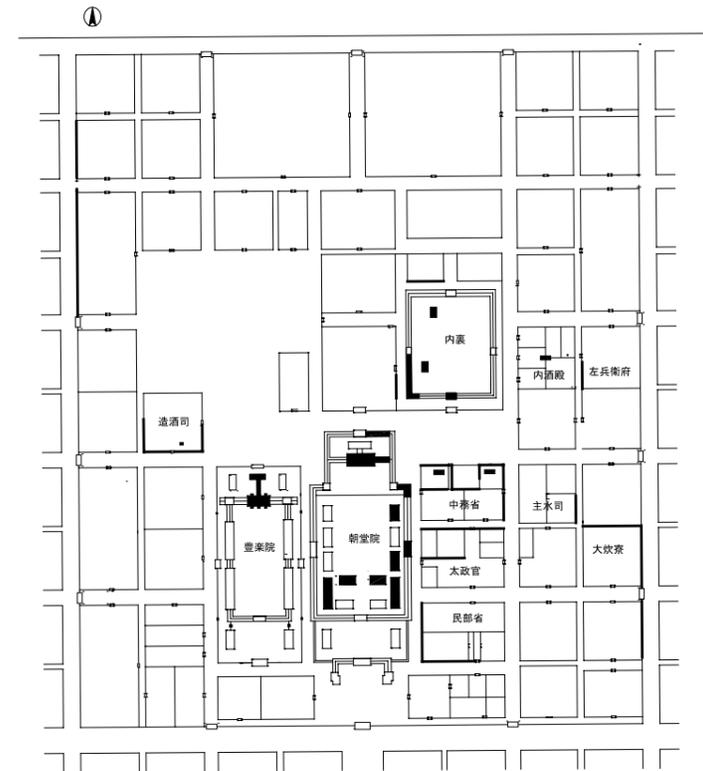


図 6 平安時代前期遺構による平安宮復元図

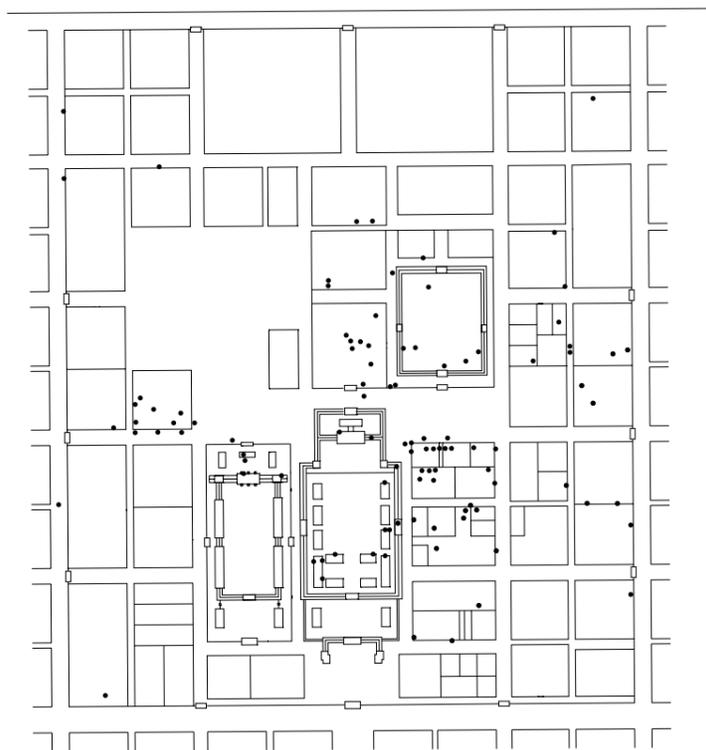


図 5 平安時代前期遺構検出地点分布図

〔『平安宮 I 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』同研究所、1995年を一部改編〕

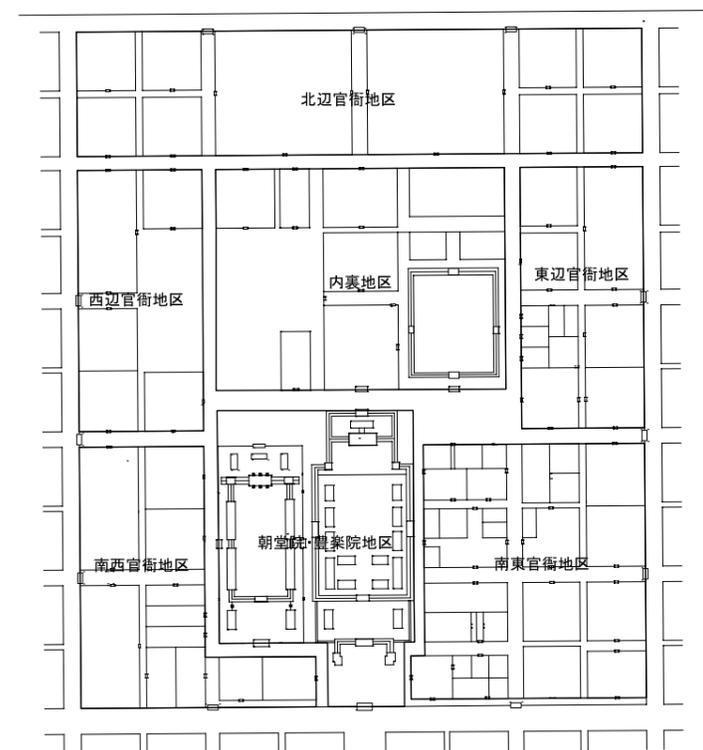


図 7 平安宮地区区分図

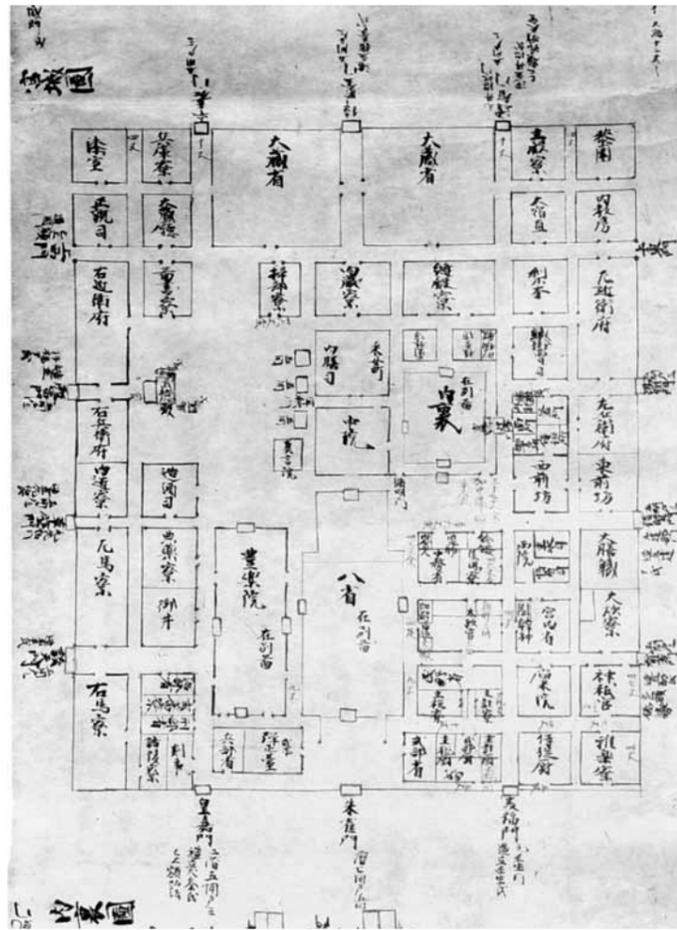


図8 九条家本宮城図

〔『陽明叢書 宮城図』思文閣出版、1996年を一部改編〕

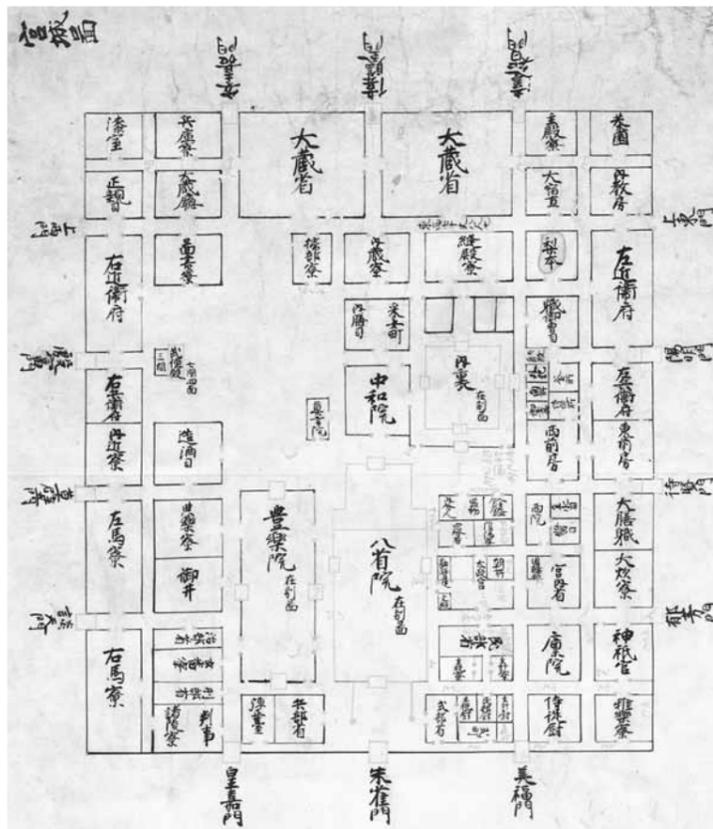


図9 陽明文庫本宮城図

〔『陽明叢書 宮城図』思文閣出版、1996年を一部改編〕

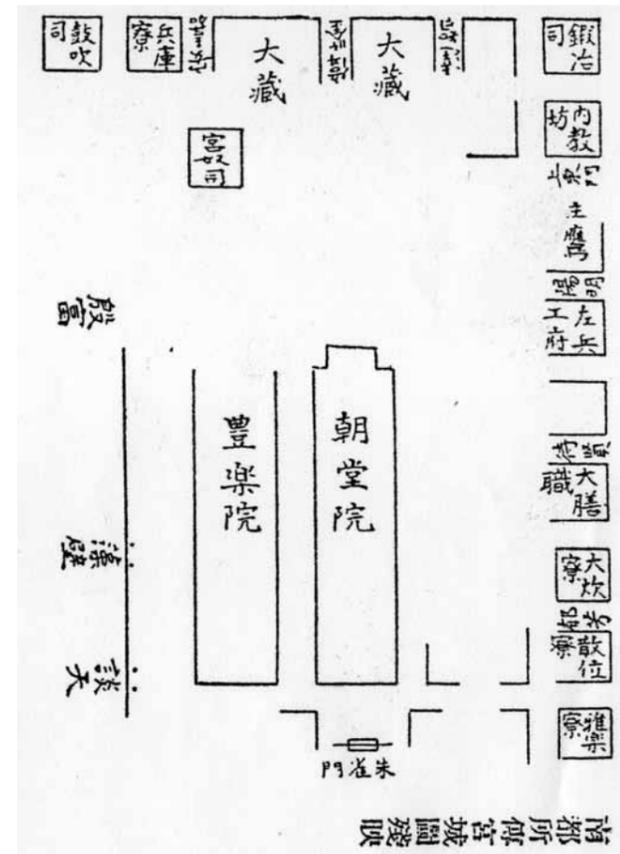


図10 南都所伝宮城図残欠

〔裏松固禪『大内裏図考証』を一部改編〕

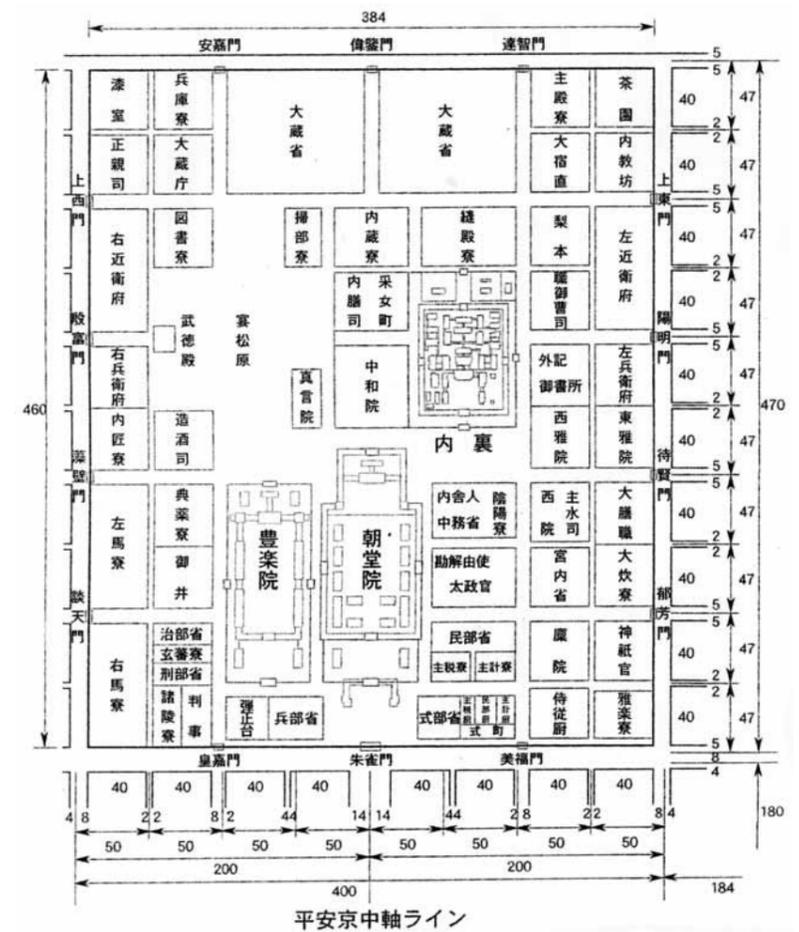


図11 平安宮復元図及び造営計画線

〔網 伸也『平安京造営と古代律令国家』塙書房、2011年を一部改編〕